C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2010

Vol.4

中学版

1 私を育てたあの時代、あの出会い

あこがれの先輩に学んだ心の交流から始める生徒指導

岩手県盛岡市立上田中学校校長◎**伊藤好男**

特集

3 「学力保障」のために、移行期間の今できること 第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

4 インタビュー

授業との連続性にこだわり見通しと方法を伝える家庭学習指導を

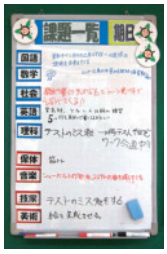
国立教育政策研究所主任研究官◎**山森光陽**

8 実践事例 1

「サイクル学習」で授業と家庭学習の質を高める

宮城県登米市立東和中学校

〈自校化の視点〉東北大大学院教育学研究科准教授◎**谷口和也**



14 実践事例 2

二種類の「学び方の手引」と学習記録で学び方を指導

茨城県常陸太田市立北中学校

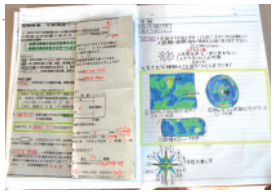
〈自校化の視点〉日本女子大人間社会学部教授 教職教育開発センター所長◎**吉崎静夫**

20 実践事例 3

予習を重視した家庭学習を基に「生わかり」を「本わかり」に変える

岡山県岡山市立岡北中学校

〈自校化の視点〉授業インストラクター 「認知ゼミ」主宰◎**鏑木良夫**



26 実践事例 4

eラーニングでの連携授業で家庭学習への意欲を高める

福島県南会津町立檜沢中学校

〈自校化の視点〉福島県教育庁南会津教育事務所学校教育課指導主事◎**芳賀 淳**

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い
Vol.4

あこがれの先輩に学んだ心の交流から始める生徒指導

岩手県 盛岡市立上田中学校校長 伊藤好男 ITO YOSHIO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、伊藤校長が語る。

いとう・よしお　電機メーカーに約2年勤務後、「夢のある教育の仕事に就きたい」という思いで、大学に戻り教員免許を取得。大迫町立大迫中学校、盛岡市立上田中学校、盛岡教育事務所主任指導主事などを経て現職。専門は数学。

- 1980（昭和55）
  大迫町立（現花巻市立）大迫中学校に赴任。永田豊先生と出会う

大迫中学校時代
教壇に立つ伊藤先生

- 1984（昭和59）
  盛岡市立上田中学校に赴任。菅原義子先生、本田正弘先生と出会う
- 1993（平成5）
  花巻教育事務所指導主事に就任
- 2000（平成12）
  盛岡教育事務所主任指導主事に就任
- 2003（平成15）
  軽米町立小軽米中学校に校長として赴任
- 2009（平成21）
  盛岡市立上田中学校に赴任

先輩の学級経営の手法をまねて気付いた

民間企業から転身して教師になったのは27歳の時です。希望に胸を膨らませて赴任した中学校は、喫煙、授業妨害、器物破損などが日常的に見られる荒れた学校でした。

学級経営に悩む教師が多い中、物静かながら毅然とした態度で生徒に接し、誰からも慕われる先生がいました。1学年主任を務めていた永田豊先生です。当時40歳くらい、担当教科は国語で、指導の傍ら詩集を発行される詩人でもありました。常に言葉遣いが丁寧で、声を荒らげる姿は見たことがありません。生徒と永田先生の間に深い心の交流があったからでしょう。受け持ちの学級はよくまとまっていました。

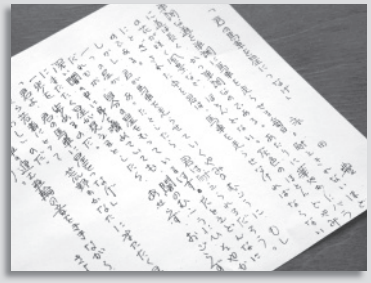
永田先生の指導を象徴していたのが、生徒向けの学級通信です。テーマは友情や悩み、劣等感、自尊心など、思春期の心の成長を願うもので、班ノートなどに書かれた生徒の言葉を引用し、「君はどう思うか」と考えさせているのが印象的でした。

例えば、「友だちが掃除をさぼっているけれど注意できない」という発言を取り上げ、「本当の友情とは

何か」「友だちの不正を許せるのか」と問い掛けていました。生徒が自分と向き合い、友だちとのかかわりを考える機会とし、良心や正義感を育てていたのです。そんな永田先生は、私にとって「かっこいい先輩」でした。少しでも近づきたくて、同じように学級通信を発行し、文体をまねたこともありました。

永田先生たちとお酒と共に交わした教育談議も貴重な学びでした。永田先生は学級経営に関する理論も豊富で、学級目標の決め方や班のつくり方など、一つひとつの活動に意味があることを教えて下さいました。私も触発されて、学級経営に関する書籍を読みあさり、必死で勉強したことを思い出します。

荒れた校内は、やがて静かになりました。教師が心を一つにし、生徒を上手に盛り立てて運営させた「学校正常化運動」の成果でした。生徒の大半は、「物言わぬ善良な子ども」です。教師の働き掛けで本来の良心を引き出し、生徒会を中心に生徒自身が声を上げ、一部の生徒による問題行動に対して「ノー」と明言できる環境をつくったのです。思春期は、教師の言葉に抵抗感を抱きやすいものですが、同年代の言葉には敏感です。同級生からの否定に対し、問題行動のある生徒は「自分たちは支持されていない」と感じ、次第に落ち着きを取り戻しました。



永田先生が卒業生に向けてつづった詩。普段から言葉に重みがあり、存在感のある先生だった

校長からの情報発信を通し心の交流を図る

1991年、勤務校（上田中学校）が全国算数・数学教育研究大会の事務局となり、私も運営に携わりました。この時、事務局長を務めた先輩の菅原義子先生、そして岩手県の算数・数学教育研究の中心人物だった盛岡市教育委員会主任指導主事の本田正弘先生からは、数学教育の面で強い影響を受けました。教科指導力を高め続けることは教師の本分。数学教育にかける情熱、妥協しない執念など、学んだことは計り知れません。この頃から「岩手の数学教育の発展」を意識し始め、96年、本田先生が立ち上げた中学校数学の学習会「創造的思考を学ぶ会」に参加。現在は私が事務局長を務めています。

校長になってからは、学校づくりの第一歩として校長からの情報発信を大切にしています。校長が何を考え、どんな学校を創ろうとしているのか、その「夢と希望」を周囲に伝え、一人ひとりの力の向き（ベクトル）を揃えたいと考えています。そして、そのことが学校を変える大きな動きにつながると信じています。先生方には「職場通信」を発行して夢を語り、例えば「人の良い点は見ようと努力しないと見えない」というメッセージを伝えています。保護者へは随筆調の「学校だより」を発行し、学校教育への理解と協力をお願いしています。そして、一番大切な生徒への情報発信は、廊下で擦れ違う時も「いつも笑顔で接し、夢と希望を語る」を信条としています。

「生徒へはいつも笑顔で接し、夢と希望を語る」

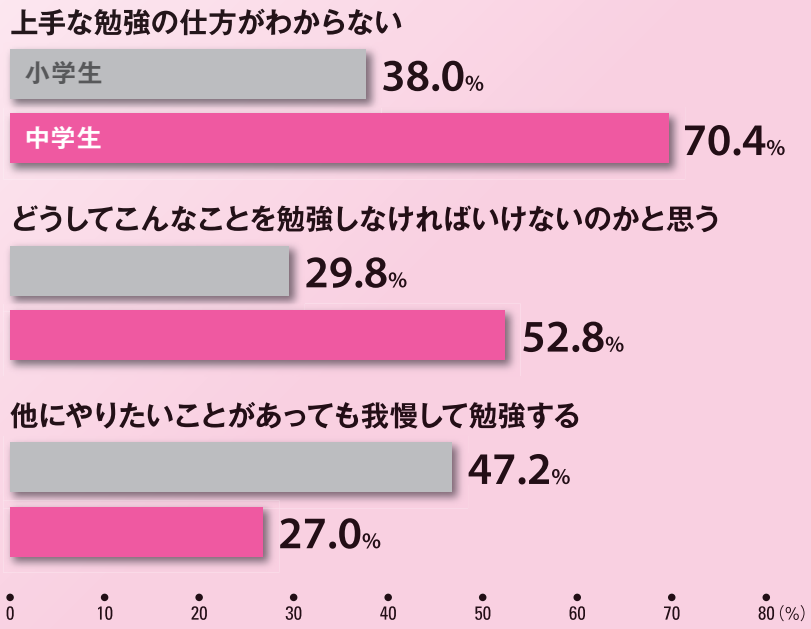
特集

「学力保障」のために、移行期間の今できること 第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

「言われた宿題をこなすだけ」「テストに出ると言った宿題さえしてこない」……。
生徒が学ぶ喜びを実感し、意欲的に学びに向かう家庭学習指導とはどのようなものか。
インタビューと学校の取り組みから考えたい。

Q 学習に関する小・中学生の意識



出典／Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」
調査時期は2009年8～10月、調査対象は全国の小学4年生～高校2年生（うち小学生は3,561人、中学生は3,917人）。学校通しの質問紙による自記式調査

インタビュー

授業との連続性にこだわり見通しと方法を伝える家庭学習指導を

国立教育政策研究所主任研究官　山森光陽

確かな学力を身に付けさせるために、どのような家庭学習指導が効果的なのだろうか。国内外の研究に基づく指導のヒントを、国立教育政策研究所の山森光陽先生にうかがった。

家庭学習にも短所がある

先生方は、家庭学習の習慣が定着している生徒ほど学力が高いことを、経験的にご存じです。これは国内外の研究でも実証されており、特に中学生以上の場合、家庭での学習時間が長い生徒ほど学力が高いことが明らかになっています。実際、限られた授業時数で必要な学力を十分に身に付けることは難しいため、家庭学習もセットにして学力向上を考える視点と指導が不可欠です。

家庭学習の指導法を考える際に、留意したい点があります。それは、家庭学習の短所です。授業と異なり、生徒が一人で行う家庭学習は、自律的な学習能力が身に付く半面、特に学力下位層の生徒にとっては苦痛です。授業で先生と一緒に勉強していても分からないのに、「一人でやれ」と言われても困ってしまうからです。このため、「ワークブックの○ページをやってきなさい」という宿題を出されると、巻末の答えを丸写しするだけになってしまう。一方、学力上位層の生徒にとっては、簡単すぎる宿題に取り組んでもつまらないだけです。いずれの生徒も、時間をかけている割に学力に結び付かない学習をしていることがあるのです。

もう一つの短所は、家庭学習が生徒の貴重な「可処分時間」を削っていることです。生徒が家で過ごす時間は限られています。部活動を終えて家に帰ると、夕飯を食べて風呂に入ります。塾や習い事がある場合もあるでしょう。学力向上は大切ですが、寝るまでの時間を勉強ではなく家族とゆっくり過ごすことに費やす、という考えもあります。しかもこの可処分時間は、通学時間や通塾の有無、家庭環境などによって個人差があります。

これらを踏まえ、「家庭学習は必要」ということを前提に、「生徒一人ひとりの学力向上にとって、どのような家庭学習が必要なのか」を、先生方に是非考えていただきたいと思います。

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

やまもり・こうよう◎慶應義塾大文学部卒業。早稲田大大学院教育学研究科修士課程修了。同大博士課程中退後、現職。元世田谷区立駒留中学校講師。専門は教育心理学。主著に『学力〜いま、そしてこれから〜』（共編著／ミネルヴァ書房）など。

生徒が「やってよかった」と思える宿題を出せているか

家庭学習の内容は、全員必須か任意か、授業と直接関係があるかないか、予習か復習か、などのタイプに分類できます。いずれのタイプの学習内容でも、共通する指導の観点として次の三つがあります。

①個人差を考慮する

授業では、一斉授業の中で机間指導を行い、生徒一人ひとりに対する支援を意識していることが多いと思います。しかし、宿題は、クラス全員に同じ内容を課すことがほとんどではないでしょうか。本来は、一人ですする宿題にこそ、個人差を考慮した題材を渡す必要があります。とはいえ、現実的にすべての生徒それぞれに合った宿題を課すことは難しいと思います。生徒の理解度に応じて4、5通りに出し分けたり、重要な内容の時だけ出し分けたりしても良いでしょう。

これに関連して、先生同士が教科間で連携することも不可欠です。各教科がそれぞれの思惑で宿題を出していたら、結果として膨大な量の宿題が生徒にのしかかってしまいます。特に、理解が遅い生徒は授業にますますついていけなくなります。「どの教科が、どのような内容の宿題を、どれぐらい出しているか」を共有して、教科間で調整を図ることが大切になります。

情報の共有と調整といっても、大げさに考える必要はありません。例えば、職員室の黒板に、教科・学年ごとに「今出している宿題」を書き込むコーナーを設けて確認し合うだけでも、共有化は十分に図れるはずです。

②学習の見通しと価値を伝える

授業と同じように、宿題でも「これを学習すると何が出来るようになるのか」という見通しを生徒にきちんと示すことが大切です。家庭学習に取り組む意義や理由が見えないと、意欲も湧いてきません。

先生としては「この宿題は、今日学んだ内容をより生徒に深く理解してもらうために出す」というねらいがあったとしても、生徒がそのねらいを認識しているとは限りません。「この宿題をして授業に臨んだら、次の授業がよく分かった」「今日学んだことが、宿題に取り組むことでより理解できた」と生徒に実感してもらえるような宿題を出すことが大切です。「授業とのつながりを考えた宿題」や「宿題で取り組ませたことを生かした授業」を意識し、授業と宿題を結び付ける指導計画を練ることで、いかにして生徒に「家庭学習の成功体験」をさせるかが鍵になります。

③学習の方法を具体的に教える

生徒が一人でも学習できる方法を教える必要があります。宿題を出す度に「こうしなさい」と言う必要はありませんが、少なくとも授業の中で効果的に家庭学習をするための方法はきちんと指導したいものです。生徒の個人差に合った家庭学習の手引を渡したり、家庭学習ノートのチェックなどを通して、出来るだけ具体的に伝えることがポイントです。

さまざまな家庭学習の方法がありますから、生徒によって効果的な方法は異なります。私たちの調査研究によると、一定の学習意欲があって頑張って勉強している生徒でも、「どのような方法で勉強しているのかはっきりと意識していない」というように自分自身の学習方法に対する自覚が低いと、思うような成績を取れていない場合があることが分かりました（**下図**）。一見、隣りの友だちと同じ方法で勉強していても成績に結び付いていない生徒には、自分に合った学習方法を探す意識を持つことと、自分にとって効果的な方法を早く見つける必要があることを伝えるとよいでしょう。

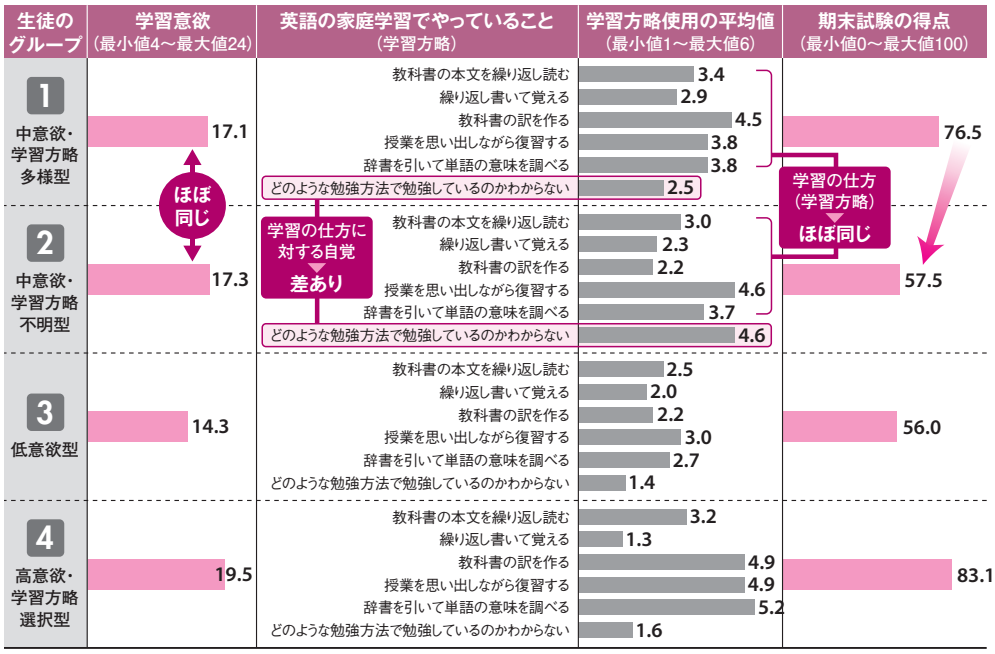
学び方を教える主体は、常に教師である必要はありません。「ついこの前まで自分と同じような成績だったのに、いつの間にか伸びていた友だち」は、生徒にとって非常に気になる存在であり、自分が学習を進めていく上でモデルにもなります。例えば、前回の定期テストで成績が大きく伸びた生徒の「学習計画の立て方」「弱点をどのように克服したのか」「ノートの取り方で工夫したこと」などの学習方法を、先生から生徒全員に伝えます。これにより、他の生徒が自分の学習方法を振り返り改善するヒントになります。あるいは、普段からノートの取り方について意見交換したり、自主学習ノートの展覧会を開くなど、学習方法の交流の機会をつくるのも一案です。

意欲が高まる定期テストは家庭学習指導のチャンス

個別対応や学習方法を伝えることの重要性をお話ししましたが、授業で出す宿題以外の場面も大切です。最大のチャンスは定期テストです。中学校の家庭学習のサイクルは定期テストを中心に回っていますから、そこを活用しない手はありません。多くの先生方が生徒に望む理想の家庭学習は、言われたことを単にこなすのではなく、自ら意欲的・計画的に学びに向かうことでしょう。定期テストの勉強はそれに近い形の学習方法でもあります。

多くの学校では、定期テストで基準点以下の生徒に再テストを課していると思います。

図　学習意欲・学習方略・学力の関係



「中意欲・学習方略多様型」1と「中意欲・学習方略不明型」2を比較すると、学習意欲も学習方略も同じ傾向を示す。しかし、「中意欲・学習方略不明型」2の生徒は自分自身の学習の仕方に対する自覚が低く、「中意欲・学習方略多様型」1と比べて学力が低いという特徴が見られる　＊Yamamori, Isoda, Hiromori, & Oxford (2003) を基に編集部で作成

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

ところが、その生徒はなぜ自分が20点だったのか、次は何をどうしたらよいのかが分かっていません。そうした状態で、単に「受けろ」と言われているから再テストを受けているのです。ここに問題があります。「一人で勉強する時にはこういうふうにやりなさい」ではなく、「こういうふうに勉強すると効果的なんだよ」ということを、テストの返却時などを使って伝えてはどうでしょうか。先に紹介した生徒同士のノートの共有についても、学習への意欲が高まる定期テスト範囲を発表する時期に行うと効果的でしょう。

例えば、私が教師をしていた時は、定期テストの答案返却時の授業1コマ分を、これからの家庭での学習法について、生徒にアドバイスする時間に当てていました。生徒の名前を呼んで答案を返す時に、1人1～2分程度の時間をかけて、「A君はここが弱点だから、家庭ではこういうことに注意して勉強しなさい」「Bさんは、次の定期テストまでにここだけは必ず覚えておきなさい」といった個別指導をするのです。テスト直後は、自分が出来たこと、出来なかったことを、生徒は自覚していますから、効果が高いと考えたのです。残りの生徒には、どんなテスト勉強をしたのかを書かせ、それを集めて、成績が伸びた生徒の学習法をクラス全体に紹介しました。

先生方は、授業で意欲を持たせるための方法や理解を深めるための方法をよく知っています。校内にもそうしたノウハウがたくさん埋もれているはずです。家庭学習も学習活動ですから基本は同じです。授業で配慮していることを家庭学習用にアレンジする発想が出来るかどうか、そこに生徒の家庭学習を充実させるヒントがあるように思います。

学びに向かう集団づくりが家庭学習への意欲を高める

私は最近、少人数学級に関する調査研究に取り組んでいますが、「少人数学級の方が、生徒はより積極的に家庭学習に取り組むようになる傾向が強い」ことが分かりました。少人数学級には、他にも「生徒がお互いに励まし合うようになる」「生徒がお互いに励まし合うといった向社会的行動が見られるようになる」「クラスへの帰属意識が高まる」といった効果が明らかになっています。

私は、少人数学級と家庭学習の関係についてこう考えています。先生と生徒、あるいは生徒同士の関係が良好だと、生徒が落ち着いた雰囲気の中で、互いに励まし合いながら主体的に学習に取り組むようになり、その結果、家庭学習に対する意欲も高まる、という相関関係です。正確に言うと、「少人数学級にすれば家庭学習時間が増える」わけではなく、「生徒集団に学びに向かう雰囲気が出来ると、生徒一人ひとりの家庭学習に対する意識が高まっていく。学びに向かう雰囲気は、少人数学級の方がより形成しやすい」ということだと思います。言い換えると、教室の中で学びに向かう雰囲気が形成されていないのに、個々の生徒に家庭学習習慣を身に付けさせようとしても難しいわけです。少人数学級でなくても、学びに向かう雰囲気が学級の中に出来ていれば、そのクラスの生徒の家庭学習意欲は高まりやすいと考えられます。

教科担任同士、教科担任と学級担任がそれぞれの強みを発揮しつつ連携し、すべての生徒にとって本当に学力につながる指導とはどのようなものかを学校全体で今一度考え、出来るところから取り組んでいただきたいと思います。

家庭学習の課題

- 生徒の取り組みに個人差が出る
- 生徒の自由な時間を制限してしまう

意欲を引き出す家庭学習指導のポイント

- 個人差を考慮する
- 家庭学習の見通しと価値を伝える
- 家での学習の仕方を具体的に教える
- 学習意欲の高まる定期テスト期間を活用する
- 学級経営を家庭学習の促進に活用する

引用文献：Yamamori, K., Isoda, T., Hiromori, T., & Oxford, R. (2003).Using cluster analysis to uncover L2 learner differences in strategy use, will to learn, and achievement over time. *International Review of Applied Linguistics*, 41, 381-409.

実践事例 1

「サイクル学習」で授業と家庭学習の質を高める

宮城県 登米（とめ）市立東和中学校

予習課題、レディネス課題、復習課題――。登米市立東和中学校は、全学年、授業で毎回出す課題のねらいを明確化。授業と連動した宿題を出し、授業と家庭学習のサイクルを回すことによって、生徒の学習意欲を高めようとしている。

学校と生徒の様子、課題

小規模校での「授業力向上」が課題

宮城県北部に位置する東和中学校は、校区の約80％を山林が占める。かつては林業が主要産業だったが、現在は兼業農家の家庭が多い。生徒数は10年前に比べてほぼ半減し、今は1学年2学級の小規模校だ。

同校に対する地域の関心は極めて高い。特に部活動に熱心で、保護者の強力な支援を受け、アーチェリー部が全国優勝した他、ソフトテニス部は県トップレベルの強豪だ。

一方、学習面では課題があった。全国や県の学力と比較すると、登米市全体の平均はやや低かった。詳しく分析した結果、子どもの家庭学習時間の平均が、全国や県の平均よりも少ないことが判明した。そこで、市は2009年度から学力向上策の中に「家庭学習の定着」を位置付け、具体策として、授業と家庭学習を連動させる取り組みである「登米っ子学習」を市立の全小・中学校で実践することにした。東和中学校はその研究指定を受けた。

同校では「宿題を出す」という指導が定着していなかったため、「サイクル学習」で授業との関連を重視した課題を宿題にして、生徒が家庭学習に取り組む必然性をつくることをねらいとした。

「サイクル学習」導入のねらいは、授業の質を高めることにもある。同校は小規模校のため、教師は全員で12人、9教科のうち6教科は教科担任が1人ずつしかいない。そのため、教師が授業力を高めにくい状況にあった。08年度に赴任した吉沢真介校長はそうした課題を目の当たりにし、教科を超えた教師全員の参加による校内授業研究会を増やした。当初、教師は他教科の担当と意見交換をすることに消極的だったが、授業と家庭学習を連携させる「サイクル学習」を全校挙げて実践し、それを起爆剤として、教師のこうした状況を打破することを目指すことにしたのだ。

School Data

◎1976（昭和51）年開校。少人数グループで模擬会社を設立・経営する起業学習や、90以上に及ぶ職業講座などによるキャリア教育に力を入れる。

校長◎吉沢真介先生

生徒数◎174人　学級数◎11学級（うち特別支援学級5）

所在地◎〒987-0902　宮城県登米市東和町米谷字細野35

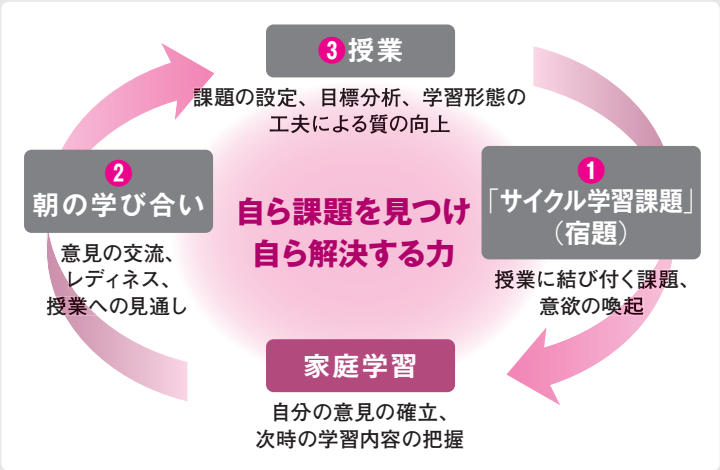
TEL◎ 0220-53-2002

URL◎ http://www.tome-svr.jp/~touwa-chu/html/

公開研究会◎ 未定

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導



次時に関する課題を出し授業への意欲を喚起する「サイクル学習」

◎「サイクル学習」は、家庭学習時間の確保が目的ではなく、授業への意欲を喚起させることが目的である。次時に関連する「サイクル学習課題」に家庭学習として取り組ませることによって、学力の差にかかわらず、クラス全員が授業に見通しを持って取り組めるようにしている。これを繰り返すことによって、学習意欲を高め、家庭学習に自律的に取り組めるようになることもねらいだ。

取り組みのポイント

◎概要 全学年、全教科で毎回宿題を課す

「サイクル学習」は、授業→「サイクル学習課題」（宿題）による家庭学習→「朝の学び合い」→次の授業、という順で行うのが基本となる。同校の「サイクル学習」の実践を通した目標は「わかってできる生徒の育成」だ。具体的な方法は次の3点である。

❶「サイクル学習課題」（宿題）を、原則として全学年、全教科の授業で毎時間出し、次時の授業への興味・関心を維持すると共に、次時の生徒のレディネスをそろえる。

❷火曜日から金曜日は、朝15分間の「朝の学び合い」の時間で、生徒が4人1組となり、その日が期日の「サイクル学習課題」に取り組んできたかをチェックする。分からなかった内容があれば班内で教え合い、学習内容の定着を図る。

❸授業では、課題解決型の指導を心掛ける。

研究主任の佐々木貴子先生は、全教科において「サイクル学習課題」を課す理由を次のように話す。

「生徒たちの思考力や活用する力を伸ばすためには、実技教科の宿題も欠かせません。授業と家庭学習がつながっていることを生徒たちに実感させるために、すべての教科で毎授業、『サイクル学習課題』を出しています」

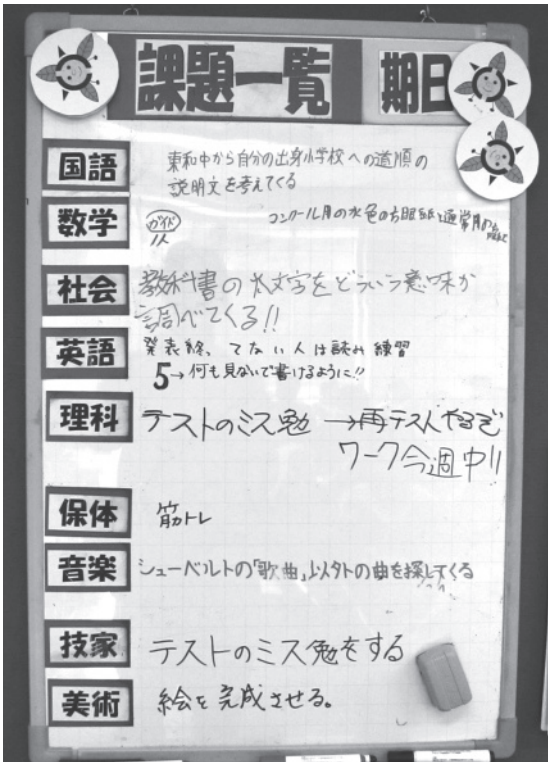


写真　黒板の横にあるホワイトボードに、「サイクル学習課題」がまとめて書かれている。各教科15分程度で終わる量が目安

登米市立東和中学校校長
吉沢真介 Yoshizawa Shinsuke
「いつ何時、どんな生徒の前に出ても、授業を成立させられる教師でありたい」

登米市立東和中学校
佐々木貴子 Sasaki Takako
研究主任、国語科担当。「常に生徒に伝えていることは、『今はただ、可能性のみ追求せよ！』」

◎「サイクル学習課題」の内容
年間指導計画に日々の課題内容を盛り込む

「サイクル学習」の最大の特色は、授業と家庭学習を関連付け、ねらいを明確にした課題を出していることである。すべての教科で毎回課題を出すといっても、授業中に終わらなかった問題を課題にするような、その場しのぎの出し方はしない。次の三つのうちのいずれかの意図を「サイクル学習課題」に持たせるよう、教師は意識して課している。

❶予習課題―次時で学習する内容に興味・関心を抱かせる。または、自ら課題を発見させ、解決しようとする意欲を喚起する。

❷レディネス課題―次時の学習のねらいを達成するために必要な既習事項を確認する。

❸復習課題―習得した知識・技能の確実な定着を図り、次時に行うテストに備える。

この三つをどのように使い分けているのだろうか。佐々木先生は、「単元の導入部分では予習型の課題を、単元の最後のまとめでは復習型の課題を中心に出題するというように、教師一人ひとりが授業に合わせて考えています」と話す。

佐々木先生の担当教科である国語の場合、単元の導入部分では漢字練習や意味調べを課題にすることが多い。他には、題材の内容に対する興味を引き出すような予習型の課題を出すこともある。単元の最後のまとめでは復習型の課題を出すことが多く、週末を挟んで取り組ませることもある。

予習型の課題を出す目的を、佐々木先生は次のように説明する。

「予習をすると授業で新たな発見や刺激が損なわれてしまうという意見もありますが、それは間違いだと思います。次の授業の学習内容への関心が低ければ、授業で獲得できる刺激も少ないのです」

「サイクル学習課題」の研究の初年度だった09年度の1年間、どの教師もいつどのような課題を出したかを記録してきた。この積み重ねを生かして、10年度の年間指導計画には「サイクル学習」をあらかじめ組み込んでいる。

「『サイクル学習課題』の出し方は、授業の組み立て方に大きくかかわります。1年間、研究を積み重ねてきたとはいえ、課題の出し方が成功することより、『別の課題の方が良かったのでは』と反省することがまだまだ多いのが現状です」（佐々木先生）

◎「朝の学び合い」
家で課題が出来なかった生徒も自信を持って授業に臨める

二つめの特色は、「サイクル学習課題」と授業との間に行う「朝の学び合い」にある。

「朝の学び合い」では、まず4人1組の班でその日の「サイクル学習課題」に取り組んできたかどうかを確認する。加えて、教科担任が話し合うように指示しておいた課題について、生徒同士で意見を交換する。課題が分かった生徒が分からなかった生徒に教えたり、他の生徒の考えを聞いて「なるほど」と思った部分をノートに書き込んだりする。

佐々木先生は「朝の学び合い」を次のように評価する。

「分からなくて出来なかった生徒に、出来た生徒が教えるという学び合いが生まれたのは、大きな成果でした。課題が出来なかった生徒も『こういうことなんだ』とある程度理解した上で授業に臨めるようになりました。学力が低い生徒が、以前より自信を持って授業に参加できるようになったのです」

10年度は、班単位による「学び合いファイル」を導入した。課題のチェック表や話し合いの結果をノートにまとめていくものだ。学級担任が放課後などにチェックし、各班の状況を把握し、指導に生かしている。

多くの生徒が課題に取り組んでくるが、一部には忘れてくる生徒もいる。そうした生徒には、学級担任や教科担任が昼休みや放課後に粘り強く個別に指導している。

「小さい学校ですから、『A君は今日、課題をやってきていない』といった情報はすぐ耳に入ってきます。学級担任と教科担任が連携して、生徒に働き掛けています」（佐々木先生）

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

図　「サイクル学習課題（宿題）」とリンクした授業例　（2年生数学・伊澤ゆかり先生）

単元	平行と合同（2時間目）
到達目標	n角形の外角の和が分かる
サイクル学習課題	1．n角形の内角の和を求める公式は？ 2．（1）八角形の内角の和を求めなさい 2．（2）三角形の外角と内角の和を求めなさい

復習課題

レディネス課題

時間	学習内容・活動	指導上の留意点
	この日は「朝の学び合い」の時間が取れなかったため、チャイムが鳴る前に互いに「サイクル学習課題」に取り組んできたかを確認させた	
導入	◎復習課題の答え合わせ ◎近くの席の生徒同士がお互いの解答を見せ合って答え合わせ **1．n角形の内角の和を求める公式は？** ・前時の授業での既習事項の確認問題。生徒たちに答えさせる **（答え）180°×（n－2）** **2．（1）八角形の内角の和を求めなさい** ・前回の授業の既習事項の確認問題。生徒たちに答えさせる **（答え）180°×（8－2）＝180°×6＝1080°** **次の課題は「外角と内角の和」という既習事項を組み合わせて考える課題であることを説明** **三角形の外角とはどこかを生徒に問い掛け、生徒に外角を記入させる** **2．（2）三角形の外角と内角の和を求めなさい** ・レディネス課題の答えを生徒たちに発表させる ・生徒から520°、360°、540°の3つの予想が出た ・一箇所の外角と内角の和が180°。三角形ではそれが3つあるから540°であることを解説　**（答え）540°**	「正解を聞いているのではありません。予想でいいからどんどん発表してください」と繰り返し言い、生徒の多様な考えを引き出すように工夫 レディネス課題では、正解を出すことより自分で考えることを大切にするようにと声を掛ける
展開	◎三角形の外角と内角の和の出し方を踏まえて、多角形の外角の和の授業を展開 ・4人1組の班での「学び合い」を中心に、好きな多角形の外角と内角の和を計算させる ・多角形の外角の和は（外角と内角の和）－（内角の和）であることを用いて、「十二角形」や「二十角形」などのさまざまな多角形の外角の和を、生徒たちが黒板に出て発表 ・すべて360°になった 4人1組の班で向かい合って相談し合う「学び合い」の時間を設定	
まとめ	◎多角形の外角の和は360°であることを確認 ◎次の授業の「サイクル学習課題」を提示 サイクル学習課題：①正八角形の1つの外角の大きさを求めなさい ②1つの外角が30°である正多角形は何角形ですか	復習課題

伊澤先生のコメント　「サイクル学習課題」を取り入れることによってレディネスが高まり、授業では学び合いや新たな問題に挑戦する時間を確保できるようになりました。

◎校内研修体制の改革

ワークショップ形式で誰もが発言できる環境をつくる

校内授業研究会の方法を、「サイクル学習」の導入を契機にワークショップ形式に変えた。

教師全員を三つのグループに分け、テーマに沿って討議した後、グループの代表が発表する。グループの分け方はその都度変えており、時には抽選ということもある。ワークショップの進行役となるファシリテーターや記録係といった役割分担も、その場の抽選などで決めることが多い。特定の教師だけが発言する状況を避けるため、グループも役割を固定化せずに、誰もが発言できる環境にしている。

「ワークショップで取り上げる内容は研究主任が調整しますが、焦点化する切り口はその時のファシリテーターによっても違います。授業のねらいを達成できたかどうかという視点だけは外さないようにし、必ず話し合いの軸にしています」（吉沢校長）

成果、今後の課題

次に何を学ぶのかを意識 自主学習の内容が変わる

「サイクル学習」は始まって2年目となり、生徒の学習の様子にも少しずつ変化が表れてきたと、佐々木先生は話す。

「ただ受け身で授業を聞いているのではなく、次の授業で何を勉強するのかを考え、主体的に学ぶ意識を持つ生徒が増えてきたと感じます」

目に見えて変わってきたのは、「自学ノート」への取り組み方だ。これは、「サイクル学習課題」とは別に、家庭学習として取り組む教科や内容を自分で選んで勉強し、毎日提出するノートである。以前は大きな字で漢字や英単語を書くだけの生徒が多かったが、「サイクル学習課題」を課すようになってから、授業内容を復習する生徒が増えた。

成果は数値にも表れている。家庭学習時間の調査では、「30分未満」「30分から1時間」の割合が減ってきている。

「授業でより多くのことを学ぶために、家庭学習が必要なのだということが、生徒に少しずつ浸透してきました。今後は、生徒自身が自分で学びの計画を立てられるような力を付けさせたいと考えています。その力は、高校や大学での学びにつながるからです。単にプリントを課すだけでなく、計画の立て方や勉強の仕方が身に付くための家庭学習指導が必要であり、そこまで深めていくのが今後の課題です」（佐々木先生）

教師も変わった。先を見通した授業づくりをするようになってきたのだ。

「家庭学習で何に取り組ませるかまでを考えて授業計画を立てるようになったのは、大きな変化です。次の授業で何をするかを明確にイメージできなければ、的確な課題は出せません。更に、授業の終わらせ方も変わりました。『時間がなかったからここまで』という中途半端な終わり方でなく、授業のねらいを完結させるようになりました」（佐々木先生）

これまでの授業研究会では意見交換が活発でない面もあったが、「サイクル学習」を取り入れて、校内研修をワークショップ形式に切り替えたところ、すべての教師が積極的に発言するようになり、授業改善に意欲を持つ教師が増えてきた。研究を始めた当初は、研究主任、または指導主事らがファシリテーターを担っていたが、今はどの教師もファシリテーターを務められるようになった。吉沢校長は今後の展望を次のように話す。

「教科指導力の向上が重要だと分かっていても、教科担当が1教科につき1、2人しかいない本校では研修にも限界があると思っていました。しかし、家庭学習をテーマにすることによって、教科の壁を超えて教師たちが一緒に議論することができ、授業力を高めていくことは可能であると確信しました。取り組みの成果と課題を教師間で共有しながら、今後も授業力の向上を模索していきたいと思います」

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回
意欲を引き出す「家庭学習」指導

自校化の視点

「知識」から「見方・考え方」を問う課題設定への転換が鍵

東北大学院教育学研究科准教授
登米市立東和中学校学力向上アドバイザー
谷口和也
Taniguchi Kazuya

「学力下位層には知識定着の宿題以外は無理」とお考えの先生もいるでしょう。それは誤解です。知識の定着以上に「見方・考え方」を問う課題は、特に上位層と下位層に有効です。上位層にとっては自分の知識を自由に使いこなせるから面白いし、下位層にとっては知識以外で勝負できますから「自分も分かった」と授業に参加できる喜びを感じやすくなります。例えば、「教育問題」を考えてください。知識に差があっても教育学者も教師も保護者も同じ土俵で議論できます。これと同じです。「見方・考え方」を「サイクル学習」に取り入れることで、結果として下位層の生徒に知識習得への欲求が生まれるのです。

相対評価の時代には、生徒間の知識の差を利用した学習観が主流でした。しかし今は、解釈や表現の勝負となる絶対評価時代の学力向上策への転換が求められているのです。

◎取り入れたい考え方
多様な見方を生み出す課題で生徒全体の底上げが可能に

東和中学校の取り組みで優れている点は、家庭学習を「サイクル学習」に組み込み全校で行っていることと、「朝の学び合い」にあります。私が見学した授業では、生徒に疑問点を考えさせたり調べさせたりする課題を与えていました。生徒が多様な見方・考え方を持ち寄った上で授業を展開することで驚きや発見が生まれ、授業がより深まっていました。

「サイクル学習」は、家庭学習時間の確保が目的ではなく、家庭学習を通して授業に対する意欲を高めることが目的です。生徒が「さっきの授業、どう思った?」と休み時間に話題にしたり、「こんなものを見つけた」と自己学習したりと、「授業と授業の間」の学習を促すような工夫が必要です。

◎取り組みを深める視点
宿題・授業・テストの全体を見通した設計を

「サイクル学習」の充実のためには、次の三つのサイクルを回すと良いでしょう。

一つめは、授業と授業の間を家庭学習でつなぐサイクルを充実させること。

二つめは、授業と定期テストのサイクルです。授業で考えたこと、体験したことがテストの得点に結び付けば、生徒の強い学習意欲につながります。逆に、授業に課題解決のための活動を積極的に取り入れても、テストで単に語句を答えさせるような出題をしていては、生徒に「活動は遊びですよ」というメッセージを発しているのと同じです。

三つめは、定期テスト同士をつなぐサイクルです。定期テストの範囲が変わっても、テストの問題形式が同じではもったいない話です。例えば、1学期の中間テストは理由を表現させる形式、期末テストは比較させて表現させる形式など、1年間の見通しを持ってテストを設計すると、生徒の学習意欲がより高まるはずです。

まずは1学期分の宿題と授業と定期テストのサイクルを設計してみてはいかがでしょうか。生徒に何を理解させ、何に驚いてもらうのか。ベテランの先生ならそれほど時間をかけずに出来ると思います。

たにぐち・かずや　広島大大学院教育学研究科博士課程修了。大学院生時代に公立中学校で非常勤講師を経験。岩手大教育学部助教授等を経て、現職。専門はカリキュラム論。数校の公立・私立中学・高校で授業やテストの開発に携わる。2009年から東和中学校の学力向上アドバイザー。

実践事例 2

二種類の「学び方の手引」と学習記録で学び方を指導

茨城県 常陸太田市立北中学校

常陸太田市立北中学校は、「授業用」と「家庭学習用」の二種類の「学び方の手引」を生徒に配布。更に、毎日の家庭学習や定期テスト学習の内容を生徒が振り返り、教師がチェック・アドバイスするシートを運用することで、すべての学力層を丁寧に見取り、学習習慣の定着を図っている。

学校と生徒の様子、課題

学び合いを通じて意欲を高め家庭学習を充実させたい

のどかな農村地帯に位置する北中学校は、1学年1学級、全校生徒95人の小規模校だ。保護者には同校の出身者も多く、三世代の同居率が高いという。2008年度には校区内の二つの小学校が統合したため、小学校時代に同じ教室で学んだ子どもがそのまま同校に進学してくる。

鴨志田悟校長は、そうした環境にある同校の特徴と課題を次のように話す。

「本校は、生徒や家庭の様子を十分に把握した上で、きめ細かく指導できる環境にあります。生徒同士、教師と生徒の信頼関係も築かれていて、落ち着いた雰囲気の中で授業に取り組んでいます。一方で、生徒は小学校時代から同じ集団で学び続けているため、人間関係が固定化され、幅広い視野を持ちにくかったり、刺激を受けにくかったりするのが課題です」

そこで同校では、地元で開かれるイベントでのボランティア活動を推奨し、職場体験学習や福祉体験学習を3年間で実施するなど、学校外の人たちと触れ合う機会を出来るだけ多く持たせ、視野を広げさせようとしている。

学力面では、全体の平均を見れば問題はないものの、授業についていけずに50分間ずっと我慢しているような生徒がいる。この課題解決のため、ここ数年は、すべての生徒が意欲的に学びに向かえるような授業の在り方を、家庭学習指導の在り方と併せて模索してきた。

鴨志田校長が赴任した09年度からは、全教科において、学級全体の学び合いと小グループの学び合いを組み合わせて授業を展開している。小グループの学び合いは4人のグループ活動が中心で、東京大の佐藤学教授が提唱する「学びの共同体」を実践する。鴨志田校長は、「学び合いを取り入れた授業の充実が、家庭学習にも良い影響を及ぼすのではないか

School Data

◎1947（昭和22）年開校。2003年度、文部科学省の学力向上フロンティア事業推進校に指定。国指定重要文化財やそば栽培など、校区内の名所旧跡や特産物を生かした体験学習にも力を注ぐ。

校長◎鴨志田悟先生

生徒数◎95人　学級数◎4学級（うち特別支援学級1）

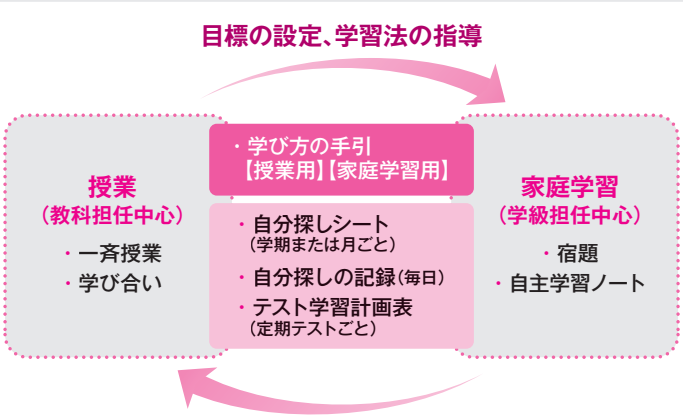
所在地◎〒313-0105　茨城県常陸太田市中利員町1969

TEL◎0294-76-2109

URL◎http://edu.city.hitachiota.ibaraki.jp/school/kitajh/index.html

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導



「学び方の手引」を教科担任と学級担任の共通言語に

◎授業は教科担任、家庭学習指導は学級担任が主に担う。生徒に配布する「学び方の手引」があることによって、教師の足並みも揃う。更に、生徒が記入する「自分探しの記録」等で、教師が家庭学習や生活面での様子などを把握すると共に、教師がコメントを書き、生徒の意欲付けを図る。授業と家庭、両方の学習の仕方を指導した上で、家庭学習の習慣化に重要な生活指導、学習意欲の醸成を行っている。

と期待しています」と話す。

「学び合いを通じて、『学ぶことは面白い』と実感した生徒に、家庭での適切な学習の仕方を指導すれば、家でも自ら進んで学びに向かうようになるでしょう。家で一人で学習していて分からないことがあれば、学校で友だちに質問したりするでしょう。そこでまた、学び合う場面が生まれるのです」

こうした質の高い指導を実現するために、全教師を先進校へ研修に派遣したり、校内でも月1、2回の頻度で授業研究を行っている。

常陸太田市立北中学校校長
鴨志田悟 Kamoshida Satoru
「学び合いによって、一人ひとりが主人公となる学校づくりを通して、夢に向かって挑戦する生徒を育てたい」

常陸太田市立北中学校
川﨑博文 Kawasaki Hirobumi
教務主任、社会科担当。「何事にも前向きに努力し、力を最大限に発揮できる生徒を育てたい」

常陸太田市立北中学校
浅野勝好 Asano Katsuyoshi
1学年担任、技術科担当。「生徒一人ひとりが夢や目標を実現できるよう、出来る限りの支援をしていきたい」

取り組みのポイント

◎「学び方の手引」を作成
学習の仕方を教え中1ギャップの解消を図る

同校が家庭学習指導の強化に本格的に着手したのは、05年度のこと。まず「学び方の手引【授業用】」「学び方の手引【家庭学習用】」という冊子のセットを作成し、生徒に配布した。「目的は、中1ギャップを解消することにありました」と、1学年担任の浅野勝好先生は話す。

「教科担任制への戸惑いが、学習意欲や授業の理解度を低下させる大きな要因になっていたため、『学び方の手引』の授業用を作成しました（P.16図1）。また、授業と家庭学習は別々のものではありません。教科ごとの授業の受け方が分かれば、授業の内容も理解でき、学ぶ喜びを味わえます。それは、家庭学習に意欲的に取り組むきっかけとなります。家庭学習の仕方が分かり、生徒一人ひとりの家庭学習が充実すれば、授業への意欲が更に高まり、理解がもっと深まるのではないかと考え、家庭学習用の『学び方の手引』（P.16図1）も作成しました」

「**授業用**」はB5判の20ページ程度で、これからの社会で求められる学習法や、教科学習の土台となる生活習慣について、更に9教科それぞれの授業の進め方、授業で求められる姿勢、ノートの取り方などを細かく記している。

「**家庭学習用**」は、サイズとページ数は「授業用」と同じであり、内容は家庭学習の「ね

らい」と「仕方」の2部構成とした。家庭学習の仕方は、学力下位層の生徒にも分かりやすいように、計画の立て方、予習・復習の方法、定期テスト前の学習の方法を概説。更に教科ごとに、家庭学習の進め方と家庭学習用ノートの書き方を具体的に示している。

また、学力上位層の生徒を念頭に、「発展的な学習に取り組むときのヒント」を教科ごとに説明している。

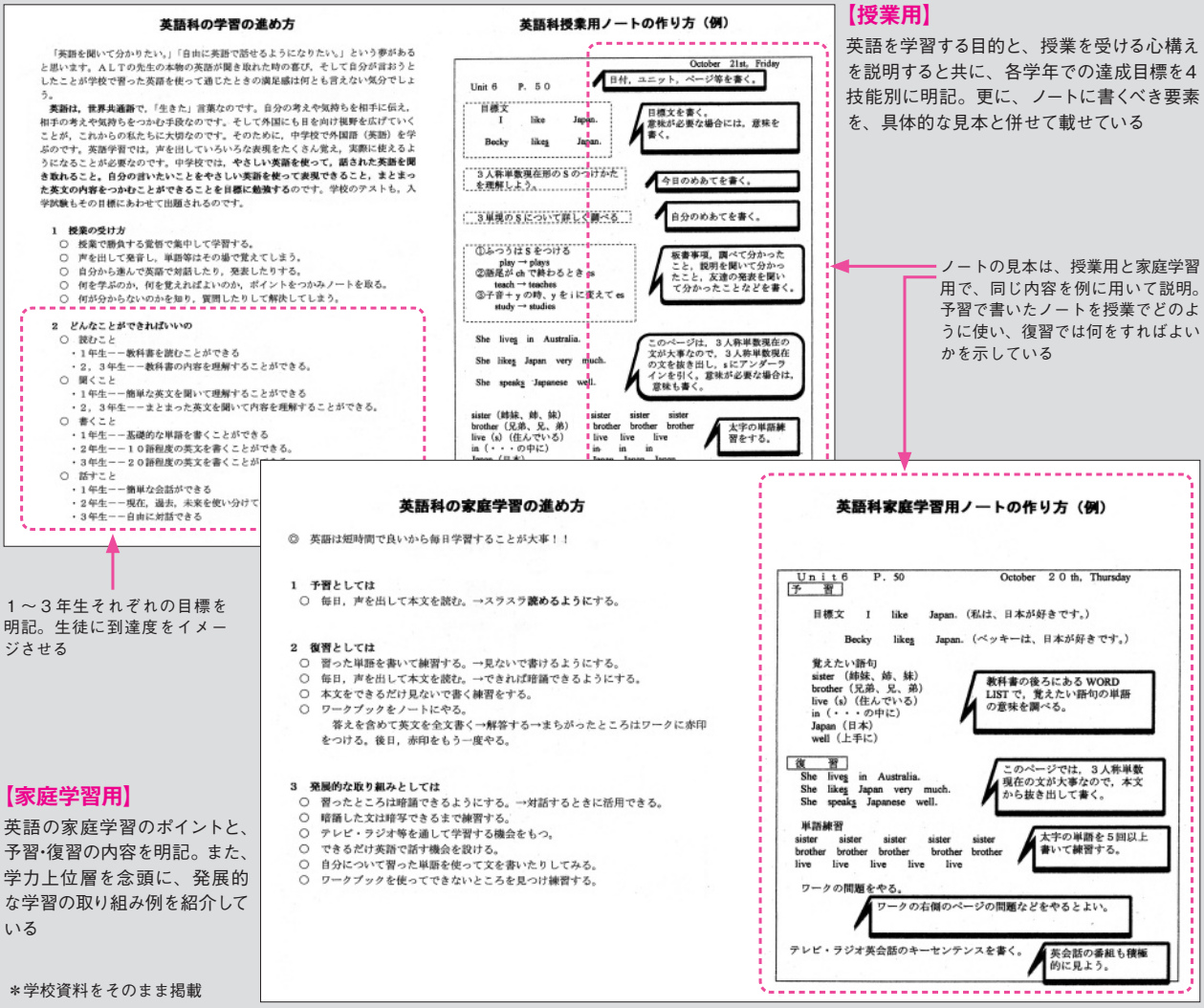
◎「自分探しシート」と「自分探しの記録」―毎日の学習記録と日記を提出させ、意欲を育む

「学び方の手引」を配布したものの、すべての生徒の家庭学習時間が思うように伸びたわけではなかった。

教師は、生徒が「学び方の手引」に書かれている学習方法を参考にしながら、自分で家庭学習の計画を立て、意欲的に取り組むようになることを期待していた。ところが、一部の学力上位層の生徒は期待通りに学習するようになったものの、そもそも家で勉強する習慣のない生徒が、「学び方の手引」だけで家庭学習の態度を変えることはなかった。意欲面での働き掛けが十分でなかった点に加え、今日の家庭学習を具体的にどのように取り組めば良いのか、更に詳しいアドバイスが必要だったからだ。

同校は「『学び方の手引』とは別の働きか

図1　「学び方の手引」授業用と家庭学習用　英語の例



【授業用】
英語を学習する目的と、授業を受ける心構えを説明すると共に、各学年での達成目標を4技能別に明記。更に、ノートに書くべき要素を、具体的な見本と併せて載せている

ノートの見本は、授業用と家庭学習用で、同じ内容を例に用いて説明。予習で書いたノートを授業でどのように使い、復習では何をすればよいかを示している

1～3年生それぞれの目標を明記。生徒に到達度をイメージさせる

【家庭学習用】
英語の家庭学習のポイントと、予習・復習の内容を明記。また、学力上位層を念頭に、発展的な学習の取り組み例を紹介している

＊学校資料をそのまま掲載

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

けが必要ではないか」と考えた。そこで、08年度に始めたのが、学習記録を毎日つけさせる取り組み「約束学習」だ。教務主任の川﨑博文先生は次のように話す。

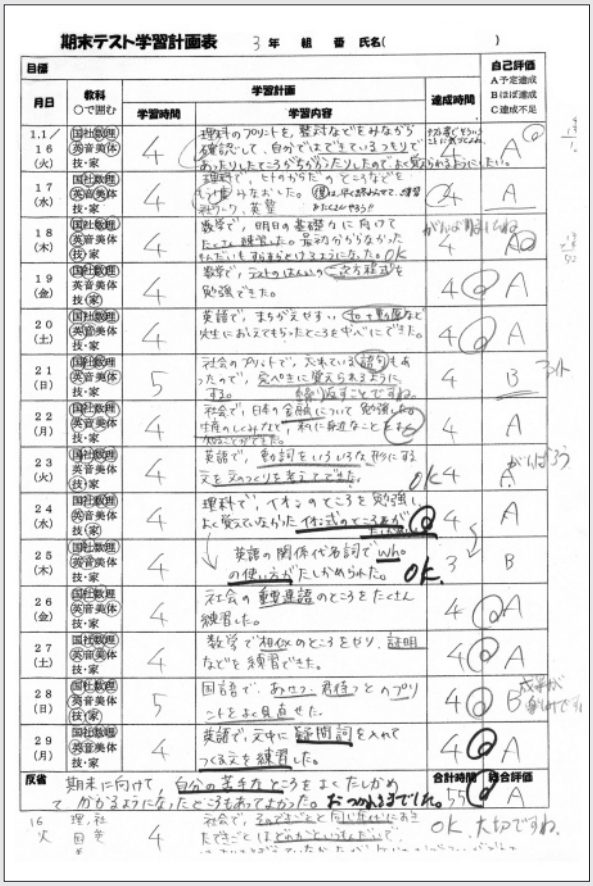
「『約束学習』では、生徒がその日に勉強しようと思っている家庭学習の内容をシートに書き込み、毎朝、学級担任に提出します。生徒が担任と『この日はちゃんと家でこの勉強をします』という約束を交わすわけです。最終的な目標は、生徒が自主的に家庭学習に取り組むことですが、家庭学習の習慣を身に付けさせるために約束することで、意図的に机に向かわせることが必要だと考えました」

10年度は、「約束学習」に代わり、「自分探しシート」と「自分探しの記録」（**図2**）を取り入れた。「自分探しシート」には、「学び」「自分探し（キャリア）」「北中楽校」の3項目についての夢や目標を、学期単位や月単位（学年によって異なる）で書き込み、「自分探しの記録」には、毎日の家庭学習や生活についての記録を書き込む。

これらのねらいは、自分の良い所を自分で認める機会をつくると共に、生徒が「自分で目標を設定し、その目標を実現するための計画を立て、実際に取り組む、というサイクルを習慣化させることだ。自己肯定感の低い生徒や学力下位層の生徒を強く意識している。

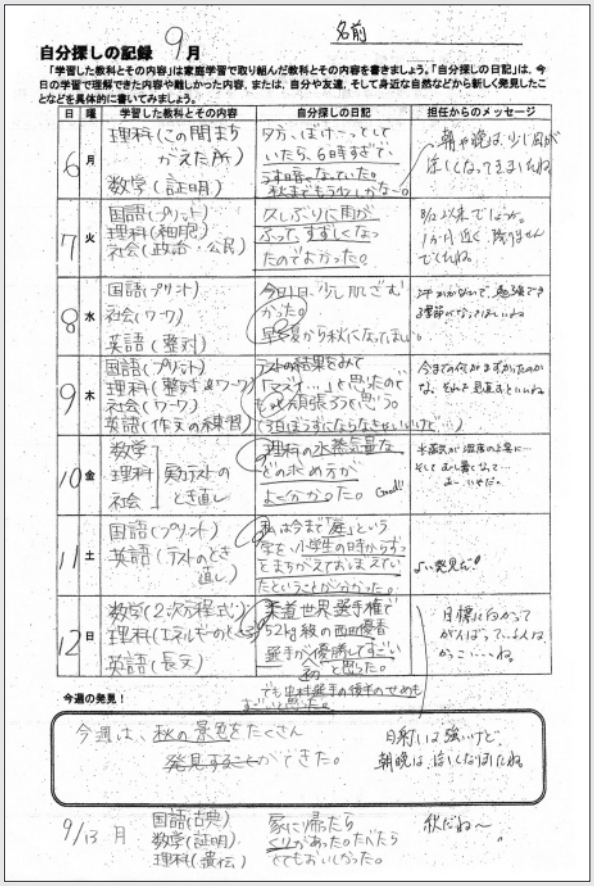
例えば、「自分探しシート」の「学び」の項目に「実力テストで合計400点以上を常

図3　「テスト学習計画表」



定期テストの2週間前から、毎日の家庭学習時間と内容、自己評価を書き、担任に提出する。学級担任、教科担任のいずれかがコメントを書いて返却。生徒の努力を認めるようなコメントを書くようにしている
＊学校資料をそのまま掲載

図2　「自分探しの記録」



家庭学習の内容と日記を書く欄があり、生徒が1日を思い返して反省したり次への意欲が持てるようにしている。学年担当がコメントを書いて返却。前向きなコメントを心掛けると共に、複数の教師が見ていることを伝えている
＊学校資料をそのまま掲載

に取れるようにします」という目標を書いた生徒は、その目標を意識しながら毎日の家庭学習に取り組むようになる。そして、毎日の家庭学習の結果を「自分探しの記録」に書き込むことによって、「今日1日、自分は目標達成に近付く勉強をこれだけやった」ということを自己確認できるようになる。「自分探しの記録」も、「約束学習」と同じように学級担任に提出することが義務付けられているため、生徒を家庭学習に向かわせるための仕組みとしても機能している。

「家庭学習習慣が身に付いていない生徒の中には、『自分探しの記録』を提出したがらない生徒がいます。しかし、生徒には昼休みなどを使って、必ず書いて提出させるようにしています。書くことによって『やはり家でも学習しなければ』という意識を生徒に持ってほしいからです。そして、『担任からのメッセージ』の欄には、出来る限り前向きなコメントを書くように心掛けています。小さな努力であっても、その努力を認めることによって、生徒の達成感や自信を育んでいきたいと思います」（浅野先生）

また、定期テストの2週間前からは、テスト勉強として何をしているのかを記録させ、毎日提出させている（P.17図3）。学習時間と学習内容を書くことで、1日を振り返り、自己評価させる場面をつくることをねらいとしている。

成果、今後の課題

学級担任と教科担任が共に家庭学習指導にかかわる

「学び方の手引」と「自分探しの記録」は、学級担任と教科担任が連携しながら、きめ細かな指導を生徒に行っていく上でも不可欠なものとなっている。川﨑先生はその成果を次のように話す。

「『自分探しの記録』をチェックするのは、学級担任の役割です。この記録を読むことによって、学級担任は生徒の家庭学習の状況を的確につかむことが出来ます。学習内容が偏っている時などには、『この教科については、もっとこんな勉強をしてみたらどうかな』といったアドバイスをしますが、このとき役に立つのが『学び方の手引』です。自分の担当教科以外についても、『学び方の手引』を参考にして、生徒に具体的に指導することが出来ます」

また、「学び方の手引」は、通常の宿題に加えて、生徒が自主的に教科や学習内容を決めて勉強する「自主ノート」をチェックする時にも役立っている。例えば、2年生には週1回のノート提出を義務付けているが、「自分探しの記録」と同様に「学び方の手引」を基にして、ノートのまとめ方に問題があったり、学習内容に偏りがないかを確認しながら、学級担任が生徒に指導している。生徒の家庭学習の様子は教科担任とも随時共有し、宿題の分量を調整することもあるという。

このように、同校では「学び方の手引」と、「自分探しシート」「自分探しの記録」が、家庭学習指導の両輪となっている。「学び方の手引」には学習内容や学習方法が書かれていて、その教科で何をどのように取り組めばよいのかをまとめている。「自分探しシート」や「自分探しの記録」は、生徒を家庭学習に向かわせるための意識付けと習慣付けの役割を果たしている。これらのプロセスに教科担任と学級担任がそれぞれかかわることで、家庭学習指導の効果を更に高めている。

今後は、学び合いの授業の質と家庭学習の意欲の両方を更に高めることが課題だ。その一案として、授業中に家庭学習の仕方を学び合うことも検討中だという。

「これまでも、『先輩はこんなふうに取り組んでいたよ』と、卒業生の『自主ノート』を見本として生徒に見せることがありました。特に、学力下位層の生徒にとっては、実物を見た方が自分は何をすればよいのか、イメージが湧きやすいからです。そこで、授業中にクラスメートのノートを見本として見せ合ったり、より良いノートづくりの方法をグループで考えさせたりすれば、教師や先輩ではなく、より身近な友だちが手本となり、学び合いが更に深まるのではないかと考えています」（川﨑先生）

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

自校化の視点

手引など具体的なツールを使った「つながる」指導

日本女子大人間社会学部教授
教職教育開発センター所長
吉崎静夫
Yoshizaki Shizuo

◎取り入れたい考え方
授業と家庭学習のつながりを教える

北中学校では、学習方法を教え、学習を振り返らせて、支援するという流れを、手引やシートなどのツールを用いて行い、学習習慣の定着と学力の底上げ、学習意欲の向上を図っています。特長は次の5点です。

①「学び方の手引」で授業と家庭学習のつながりを意識―「授業用」と「家庭学習用」それぞれにおいて、両方がつながっていることを具体例で示しています。

②家庭学習の目標の具体化・明確化と振り返り―「自分探しシート」「自分探しの記録」により、目の前の学習を生徒自身に意味付けさせ、具体的な目標を持たせています。

③短期的な目標を達成するための家庭学習を意識―「テスト学習計画表」により、普段の学習とは別に、集中して学習する時期の必要性と具体的な方法を意識させています。

④個人差への配慮―学力上位層には発展課題にも取り組ませ、下位層には確実に予習復習をさせるなど、個の視点を盛り込んでいます。

⑤生徒とのコミュニケーション―生徒が記入した内容に、担任がコメントを書いて意欲を喚起しています。生徒の頑張りを褒めている点と、気候の話など学習以外の話題で「息抜き」させている点がポイントです。

同校の取り組みは「つながる」指導と言えます。授業と家庭学習、教師と生徒、教科間、学級担任と教科担任。学校全体で生徒を学習に向かわせようとしている様子がうかがえます。私は「学び方の手引」作成の初期段階で同校とかかわりましたが、当時の考えはそのままに、校長先生のリーダーシップの下、教師一丸となって指導を進化させています。

◎新年度までに出来ること
課題を洗い出し、原因を考える

2010年12月発表のPISA2009の結果によると、全体的なスコアは下げ止まり傾向が見られるものの、上位と下位の差は拡大しています。家庭学習を「家庭任せの学習」にしていては、すべての生徒の学力を高めることは出来ません。宿題を出しっ放しにせず、授業でその内容を取り上げ、提出物は確認する。その際、担任以外の先生にも協力を仰ぐなど、学年全体で学級を見ることが重要です。学力が高いとされる自治体は、家庭学習時間がひときわ長いわけではありません。異なるのは、授業と家庭学習がつながるような学び方を丁寧に指導している点です。先生の負担は大きいかもしれませんが、学び方をチェックして家庭の様子が把握できれば、生徒指導面でも効果が期待できます。

年度末は、学校全体で1年間の学習指導の成果を振り返るのによい時期です。各種学力調査の結果を基に今一度、指導の課題と原因を考えてみてはどうでしょう。その原因は授業だけでなく家庭学習にもあるはずです。原因探しには「自分探しの記録」が役立ちます。同校のような詳細なものでなくても、生徒に「今回の定期テストの学習を振り返ってどうだったか」と聞くだけでもよいのです。特に下位層がどの教科でどのようにつまずいたり困ったりしているのかを、教師だけでなく、生徒自身が把握できる手掛かりになります。

よしざき・しずお　九州大大学院博士課程満期退学。大阪大から学術博士の学位を取得。専門は教育工学、教育方法学。長年、小・中学校の授業づくりを支援。主書に『事例から学ぶ 活用型学力が育つ授業デザイン』（ぎょうせい）など。

実践事例 3

予習を重視した家庭学習を基に「生わかり」を「本わかり」に変える

岡山県 岡山市立岡北（こうほく）中学校

岡山市立岡北中学校は、予習を重視した家庭学習を推進している。何となく授業を受けるのではなく、どこが分からないのかの見通しを持って授業に臨むことで、授業の理解度を高め、更に次時に向けた予習、授業へとつなげている。

学校と生徒の様子、課題

限られた授業時間ですべての生徒が「わかる」授業を

岡北中学校は岡山市中心部にほど近く、岡山大などが立地する文教地区にある。2008年度から3年間、校区の二つの小学校、二つの幼稚園と共に「岡山県学力・人間力育成推進モデル地域指定」を受け、東京大大学院の市川伸一教授が提唱する「教えて考えさせる授業」を実践してきた。

生徒の学力分布は幅広く、学年によって家庭学習習慣の定着に開きがある。地域と共に行う数多くの行事を大切に守りながら、一斉授業の限られた時間ですべての学力層を引き上げることが課題だ。そのために、授業を何となく受け、何が分かり、何が分かっていないのかがはっきりせずに、授業が終わってしまうという状態を避け、すべての生徒が本当に「わかる」授業を追求したいと考えていた。

取り組みのポイント

◎基本的な考え方

分かること、分からないことを予習で明確にさせる

「教えて考えさせる授業」では、家庭学習において予習を大切にする。予習によって、次時の授業について分かっていることと分からないことが明確になった「生わかり」の状態にし、見通しを持って授業に臨ませるためだ。

予習は、主に教科書を読み、分からない部分に線を引いたり、付箋紙を貼ったりという内容が多い。この予習を受けて、授業ではまず、生徒が予習でどこまで理解してきたかを教師が確認し、分かっていない部分を重点的に教える。「生わかり」だった生徒が学習内容を理解した「本わかり」の状態に変わるように授業を進める。平松茂校長は、家庭学習と授業の関係を次のように語る。

「最終的な目標は、生徒に自ら進んで学ぶ姿勢を身に付けることです。その土台となる

School Data

◎1947（昭和22）年開校。「豊かな心・確かな学力の育成」を教育目標に、幼・小・中連携に力を入れる。体育祭や文化祭はもとより、宿泊体験や地域ボランティア活動等、行事が盛ん。

校長◎平松茂先生

生徒数◎474人　学級数◎15学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒700-0081　岡山県岡山市北区津島東1-1-1

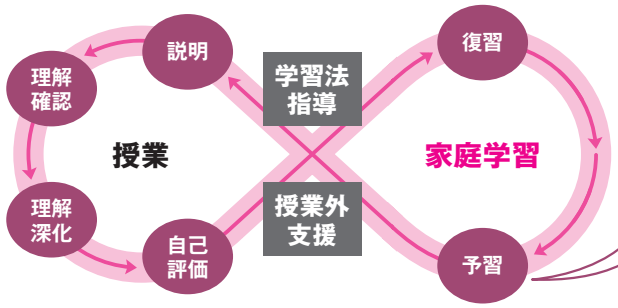
TEL◎086-252-3256

URL◎http://www.city-okayama.ed.jp/~kohokuc/

公開研究会◎2010年11月9日に実施済み

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導



目的・本時の学習内容に見通しを持つ
・「分かる、分からない」を自覚し、学習への構えを持つ

時間・家庭学習で実施
・前時の終わり、または授業開始時に行う場合もある

内容・学習範囲を読み、学習内容を知る
・大切な個所に線を引いたり、分からない個所に「?」をつけたりする
・教科書を写す（図や表、大切な言葉など）
・問題を解く
・自分の言葉で説明したりまとめたりする

予習の仕方を示し、目的を意識させる

◎予習でのポイントは、「次の授業の見通しを持って授業に臨む」という目的を意識させること。例えば、教科書をただ読むのではなく、読みながら疑問や問題点を明らかにし、自分の理解度をチェックしておくことを目指す。

学力を授業で身に付けるために、構えとなる『予習』と定着のための『復習』が家庭学習で必要なのです」

予習は実技教科を含む全教科での実施を目指しているが、全教科、毎時間で課すわけではない。単元によっては予備知識がない状態で授業を受ける方が、驚きや発見が生まれて効果的な場合があると考えるからだ。「例えば理科では、マグネシウムが激しい熱と光を出して燃えるのは、予習せずに実験で初めて出合ってほしい場面です」と平松校長は話す。

こうした考えは、復習を軽視するものではない。復習は、授業で理解できなかった部分の再確認や、更なる定着を図るための重要な学習機会という位置付けだ。

◎校長の役割
教師一人ひとりの持ち味を引き出す環境づくり

平松校長は10年度に着任以来、時間を見つけて授業を見て回るようにし、時には授業内容を細かく記録したり、デジタルカメラで撮影したりすることがある。それらを使って、授業者には、改善点を指摘するというよりも、授業の良かった点を具体的に挙げ、褒めるようにしている。

「先生方の力を更に引き出すためには、管理職や校内の先生同士であれこれ指摘してもうまくいかないことの方が多いです。むしろ外部の第三者に指摘してもらった方が受け入れやすいと思います。私の役割は、そうした場を設定し、授業スタイルや発想の異なる先生方がそれぞれ力を発揮できる環境を整えることです」（平松校長）

岡山市立岡北中学校校長
平松 茂 Hiramatsu Shigeru
「知行合一。一人ひとりの生徒や教師を大切にした上で、自分の想いを実践に移したい」

成果、今後の展望
予習する生徒が増え、授業が活性化 小中連携で更なる効果を目指す

全教科で取り組んできたことによって、生徒に予習の習慣が付き、学習規律も向上しつつある。見通しを持って授業に臨めるようになり、授業中も積極的に質問したり発表したりする生徒が増えてきたという。こうした生徒の変化を目の当たりにして、教師は家庭学習の指導スタイルの工夫にますます積極的に取り組むという好循環が、同校の中で回り始めている。

とりわけ、共に研究を進めてきた校区の小学校で予習の習慣を身に付けた1年生は、授業規律を守り、学習意欲も高い。今後も、小学校との連携を強めることで、更なる学力向上を目指す考えだ。

実践例 2年生◎数学

解けそうで解けない、授業で答えを知りたくなる課題を出す

岡山市立岡北中学校
田口直樹 Taguchi Naoki
1学年担任、数学科担当。「一番が家庭生活、二番が学校生活、三番が部活動。順番を間違えず大切にしてほしい」

◎予習の考え方 平面図形は予習型、方程式は復習型

田口直樹先生が課す予習は、教科書を一読して重要事項を確認し、線を引いてくる程度のものが多い。

「数学は、既存知識を使って類推する力が大切。そのために必要な知識をしっかり習得できる構えが予習です。たとえ内容を理解できなくても、一通り教科書に目を通してくるだけで、授業を聞いて理解する力が違うと感じます」（田口先生）

田口先生は、分野によって宿題の種類を予習と復習とで使い分けている。例えば、平面図形では予習を、文章題や方程式では復習をそれぞれ重視。文章題の意味を読み取るのが難しい生徒でも、図形なら視覚的に取り掛かることができ、一人で予習しやすいからだ。

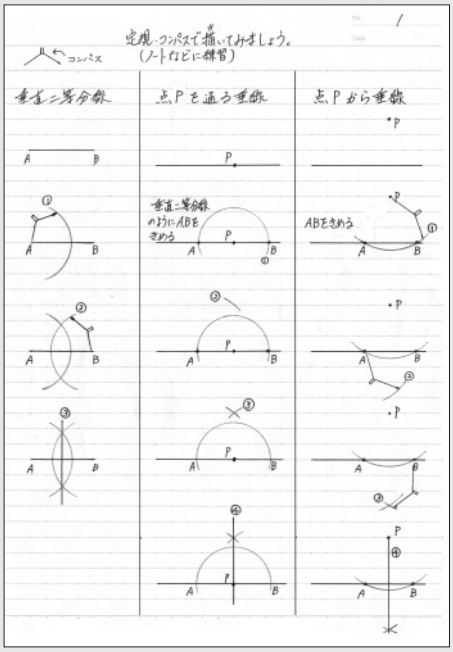
「練習問題を宿題とする場合は、どれだけ面白い問題を課題に出せるかを常に考えています。面白い問題とは、解けそうで解けない問題、次の時間に答えを知った時、『なるほど！』と思うような問題です。この工夫次第で、生徒の授業に向かう意欲が決まると実感しています。そうした問題を入試問題から探して宿題に出すこともあります」（田口先生）

◎復習教材の工夫 丁寧なプリントで下位層の家庭学習をサポート

復習時に教科書やノートを見ても、自分一人では問題の解き方や図形の描き方を再現できない生徒もいる。そこで、田口先生は、数学が不得意な生徒でも一人で復習しやすいように、自作プリントを配布している。例えば、**図1**は「垂直二等分線」「点Pを通る垂線」の描き方の手順を、コマ割り漫画のように解説するプリントだ。

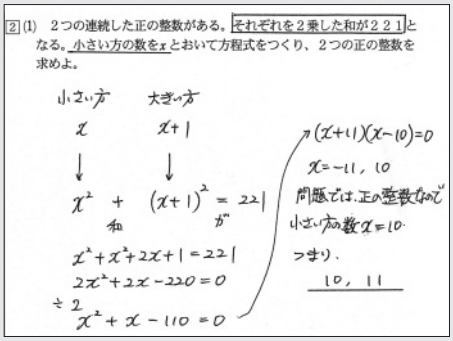
また、定期テストや小テストの後には詳細な解説（**図2**）を配布するなど、単に再テストを課すのではなく、授業中に生徒同士で教え合う時間を設定。学力下位層が数学を嫌いにならずに家庭学習習慣を身に付けられることを強く意識している。

図1　復習用のプリント



「垂直二等分線」などの描き方を順を追って解説するプリントを配布。生徒が家で復習しやすいようにするのがねらいだ。最後には練習問題を付けている　＊学校資料をそのまま掲載

図2　テストの詳細な解説プリント



定期テストと同じプリントに、先生が解答解説を書き込み、テスト後に配布する　＊学校資料をそのまま掲載

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

実践例 1・2年生◎英語

必ず予習をしてほしい時には授業中に次時の予習を行い、定着を図る

◎予習のバリエーション 夏休みの宿題は2学期の予習

塩見温子先生は、以前から1年生に予習として単語の意味調べを課していた。「教えて考えさせる授業」の実践に伴い、1年生の2学期からは文法事項の予習も追加。ちょうど学力差が広がり始める時期であるため、英語が苦手な生徒でも出来る簡単な内容を心掛けた。例えば、次の授業で学ぶ基本文型を解説した部分を読んで書き写す、といったことなどだ（図3）。

「全く何も知らない状態より、教科書に何が書いてあるかだけでも把握した状態で授業を受ける方が、学習の見通しがつくため生徒も安心するようです」（塩見先生）

一方、ワークシートやプリントといった復習の宿題も従来通り課していたため、生徒の負担は大きかった。生徒が取り組みやすい方法を模索する中で、10年度、2年生に取り入れたのが、夏休みのまとめ予習だ。2学期に学ぶ範囲の単語の意味調べをまとめて夏休みの宿題にすることによって、2学期に入ってからの予習は文法事項に特化できるようになった。

ただし、こうした取り組みを重ねても、予習をしてこない生徒がクラスに2、3割いる。そこで、必ず予習してほしいという時には、授業中に次時の予習をさせることがある。例えば、次の授業からつまずきやすい単元に入る場合、授業を5分ほど早く終えて、「予習をしてみましょう」と指示し、予習の内容や学習方法を指導するというものだ。

「予習を重視するようになってから、授業の導入がスムーズになり、後半の活用や発展へと広げやすくなり、授業全体が活性化しています。ただ、依然として、予習が習慣化していない生徒への手立ては難しく、小学校段階からの連続した指導の重要性を感じています」（塩見先生）

岡山市立岡北中学校
塩見温子 Shiomi Atsuko
2学年担任、英語科担当。「何もせずに先のことを心配するのではなく、失敗を恐れず挑戦してほしい」

図3　2年生英語の指導案（本時案と予習の概要）

目標	不定詞の副詞的用法を理解する
予習	ワークブックの「文法のポイント」を読み、ノートに写してくる

	学習活動	教師の支援
教える	〈説明〉 1 文法説明を聞き、ノートに書く 2 名詞的用法、形容詞的用法との違いを理解する	・本時のねらいを示す ・いくつかの例文を挙げ、既習の不定詞とは違うことに気付かせる **教える** 不定詞（to＋動詞の原形）は動作の目的や理由などを表すことがある。この不定詞を副詞的用法という
考えさせる	〈理解確認〉 3 ワークブックの問題を解く 4 ペアワークをする。Why～？の文に対する理由を選び、英語で答える。友だちが答えた英文を書く 〈理解深化〉 5 英語歌のを聞き、不定詞の形になっている箇所を探して線を引き、その意味を考える	・机間指導により、分からない生徒にヒントを与える ・数名指名して、答えを発表させたり、黒板に書かせたりして、説明を加える ・互いに読み方や答え方を教え合いながら、ペアで問答をさせる **考えさせる** どのような不定詞が歌のどこに出てくるだろうか ・訳詞では to＋動詞の原形が「～するために」となっていないので迷う生徒がいると予想される。互いに協力させたり、ヒントを与えたりするなどして、to＋動詞の原形～以降が「なぜ？」「何の目的で？」の問いに対する理由や原因、目的を表していることから区別すればよいことを確認する
振り返る	〈自己評価〉 6 自己評価シートで今日の授業を振り返る 7 次回の課題を知る	・評価シートの穴埋めをし、本時の学習のまとめをする ・次時は本文の内容理解を扱うことを伝える。宿題はなし

＊学校資料を基に編集部で作成

実践例 1年生◎社会

予習ノートをつくり授業は「理解を深める場」と位置付ける

◎予習の方法 板書のようなノートをつくる

10年度に赴任した藤田健児先生は、「最初は予習させることに抵抗がありました。特に歴史は、予習すると面白さが薄れると思っていたからです。今ではその考えが変わりました」と話す。予習にはノートづくりを課す。

「社会ではノートをつくる力が最も大切だと考え、『板書とノートが近づいてくると良いんだよ』と指導しました」（藤田先生）

1学期は重要語句を調べる程度にとどめ、ノートのつくり方を丁寧に教え、定期的にチェック。当初は教科書を丸写しする生徒が多かったが、次第に板書に近いノートが増えた。2学期には、予習を前提にした授業に切り替えた。板書中心から、藤田先生自作の穴埋め式ワークシートを使ったスタイルとし、生徒が自分の予習ノートを見ながら空欄を埋められるようになることを目標にした。

「授業では、ワークシートを使って予習内容を確認した上で、理解を深めることに時間を使えるようになりました。『なぜ、そういうことが起こったのか?』といった生徒同士の話し合いを通して、予習しないことで得られる驚きと同様以上の効果を感じています」（藤田先生）

出来栄えに差はあるものの、予習をしてこない生徒は各クラス1、2人程度。要点を押さえたノートをつくる生徒は、7割近いという。ノートは上手にまとめられるが、テストの成績は思わしくない生徒もいる。藤田先生はそうした生徒に対して、「諦めずに3年間続ければ、必ず実力が付く」と励ましの言葉を掛けている。

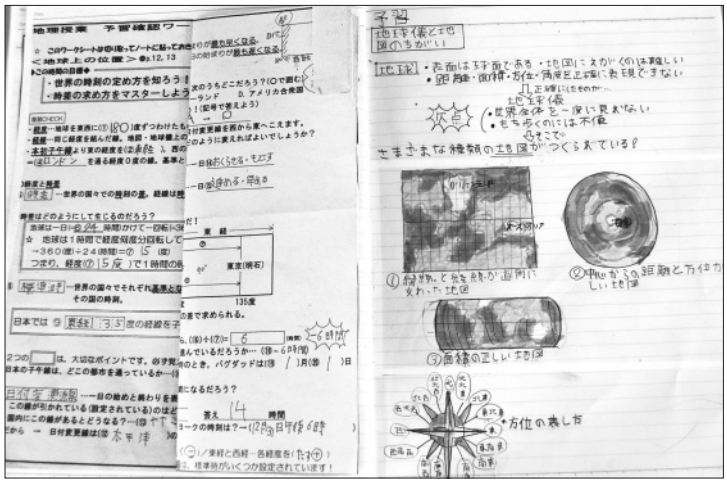
◎定期テストの復習 学びが広がる「テスト直しノート」

定期テスト後には、間違えた問題の答えと問題文のポイントを記入する「テスト直しノート」をつくる。問題に関連する周辺事項を調べたり、4択式ならば、不正解の三つの選択肢が何を意味するかも調べる生徒もいるという。こうした作業の積み重ねにより、「これは引っ掛け問題だ」と気づくなど、解答自体を楽しめる生徒が増えているという。

「テスト直しノート」は評価の対象だ。2学期の終わりには4段階評価でほぼ全員が合格のBランク以上になった。Sランクの「テスト直しノート」は手本として配布している。

「予習ノートや『テスト直しノート』をつくる力は、高校入試やそれ以降も必要な自学自習の力につながる大切な力ではないでしょうか」（藤田先生）

岡山市立岡北中学校
藤田健児 Fujita kenji
1学年担任、社会科担当。「自分を甘やかすことなく、自分を大切に出来る人間になってほしい」



1年生の予習ノート（画面右半分）。色ペン等を使い、楽しみながら工夫している様子がうかがえる。テスト勉強に備え、藤田先生手作りの授業用ワークシート（画面左半分）をセットで綴じる生徒が多い

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

自校化の視点

「書く」ことを重視した予習で授業の見通しを持たせる

授業インストラクター／「認知ゼミ」主宰／岡山県「学力・人間力育成事業」指導助言者
鏑木良夫
Kaburagi Yoshio

◎取り入れたい考え方
予習により、下位層の生徒も安心して授業に臨める

岡北中学校では、予習を取り入れた家庭学習と授業を関連付け、すべての生徒が「分かった」と言えるような授業をつくろうとしています。予習の目的は、明日習うことの概要を知り、分からない点や疑問を明らかにして授業に臨むことです。ですから、予習は、①授業内容に直結し、②生徒の実態に応じて難易度や内容を工夫し、③「見る・読む・調べる」だけでなく「書く」課題とすることが大切です。

③は、ワークシートの穴埋めではなく、文章を書くことが重要です。次時の範囲の丸写しから始めても構いません。授業の内容を答えまでノートに書くことで、生徒は見通しを持って安心して授業に臨めます。ワークシートと異なり、文章の行間を読み、文脈を理解する力を付ける訓練にもなります。

学びの機会（時間）を保障する意味で復習は大切ですが、授業が分からない生徒は復習しようにも出来ません。復習という学習機会を効果的に使うためにも、授業を理解するための予習を大切にしたいものです。また、予習によって、生徒が授業で同じスタートラインに立てることも大きなメリットです。

学びの原点は「分かってすっきりした」という快感にあります。「家で教科書を読んだだけではよく分からなかったけれど、授業を受けたら分かった。これは予習のおかげだ」と実感できる機会をつくることが大切です。

同校では、「分かる授業」とは何か、実現する方法は何かを、校長先生自身が真剣に考え、分かる授業が成立するために家庭学習も視野に入れた経営をされている点に共感を覚えます。また、そのために、自らも頻繁に授業を観察したり、小学校や研究者など外部の視点を積極的に取り入れたりして、管理職の役割の一部である「率先垂範」「インプットする場の提供」を意欲的に実践されている点も、校長経験者から見て強く印象に残ります。

◎取り組みを深める視点
固定概念にとらわれずに工夫を

生徒がスムーズに学びに向かう家庭学習の工夫を2点、提案したいと思います。

①定期テストの範囲を「積分方式」に

私が中学校長を務めていた時、定期テストの出題範囲はそれ以前の範囲も含めてはどうかと考えました。高校入試では中学3年間の学習内容すべてが出題範囲だからです。大学入試や社会人になっても、同様の場面があります。私たち教師は、短期記憶ばかり重視する指導で学びを育ててはいけないと思います。

②方眼ノートを使う

例えば、数学では定規を使わずフリーハンドでさっと図形を書けるようにしたいものですが、特に学力中・下位層の生徒は苦手なようです。方眼ノートを使えばこれが容易になります。合同や相似の概念も視覚的に理解しやすくなり、筆算もずれずに書くことが出来ます。教師も生徒も保護者も「中学生になったら大学ノート」という固定概念やプライドがあるかもしれませんが、学力保障のために本当に必要なことは何か、という視点で家庭学習指導を考え直したいものです。

かぶらぎ・よしお　日本電信電話公社電気通信研究所に勤務、病気療養後、教員免許を取得。教育委員会、公立小・中学校校長を経て、現在、全国の学校の授業改善を支援する。主著に『教えて考えさせる授業』（図書文化社・共著）他。

実践事例 4

eラーニングでの連携授業で家庭学習への意欲を高める

福島県 南会津町立檜沢中学校

南会津町立檜沢中学校は、近隣の五つの中学校と共にインターネットを活用した「ライブ授業」を全学年で行っている。チャットでやりとりをしながら他校の生徒と同時に同じ授業を受けることで競争意識が高まり、家庭学習への意欲が高まったという。

学校と生徒の様子、課題

部活動で見られる負けん気をいかに学習に向けるかを追究

福島県の西南部に位置する檜沢中学校は、全校生徒52人の単学級校だ。地域では少子化や過疎化の影響で学校の統廃合が進み、複式学級を有する学校や単学級校が増えている。ほとんどの教科で担当教師は1人という学校も多く、校内で教科研修を深めることが難しいことも課題だった。

同校は、生徒同士の学び合いや友だちと意見を述べ合う活動に力を入れてきた。ところが、元々おとなしい性格の生徒が多く、授業中の発言に消極的な傾向がなかなか変わらなかった。また、幼い頃から人間関係が固定されていることもあり、友だちに対して競争意識をあまり持たないという。渡部早苗校長は、そうした生徒の意識を次のように説明する。

「生徒にとってクラスメートは幼なじみであり、家族のような存在です。『あの子は自分より成績が良くて当たり前だ』などと捉えているため、もっと勉強して友だちに追いつこうという意識が弱いようです。その上、地域には、学習塾など他校生の成績から刺激を受ける場もほとんどありません」

一方、部活動は盛んで、ソフトボール部や剣道部は県大会・東北大会の出場実績がある。

「部活動では他校生と競い合う機会が多く、熱心に練習に打ち込んでいます。そうした生徒たちを見て、他校生と共に学ぶ環境があれば、向上心が高まり、学習意欲の向上につながると考え、それを実践できるeラーニングによる他校との学び合いに関心を持ちました」（渡部校長）

取り組みのポイント

◎eラーニングの活用

他校との競争意識が生徒を学習に向かわせる

2006年度、福島県教育委員会は、檜沢

School Data

◎1947（昭和22）年開校。2006年度から南会津郡の小規模校5校と共に「ライブ授業」や合同の学習コンテストなど、生徒の競争意識を刺激し、学習意欲につなげる活動に取り組んでいる。

校長◎渡部早苗先生

生徒数◎ 52人　学級数◎ 3学級

所在地◎〒967-0023

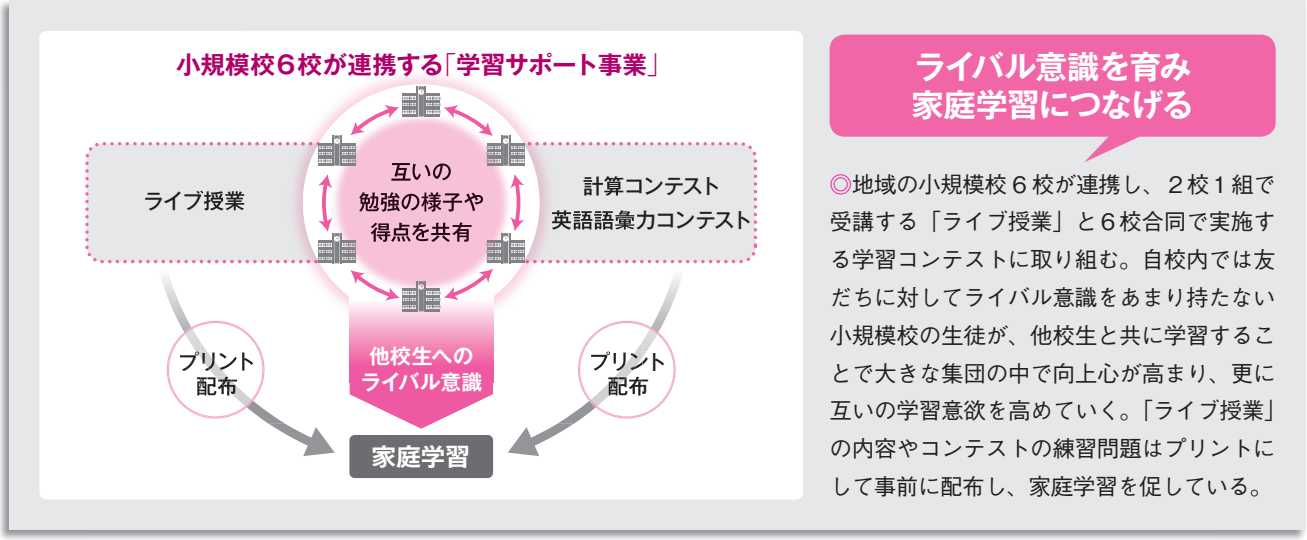
福島県南会津郡南会津町福米沢字大田1340-1

TEL◎ 0241-62-0026

URL◎ http://www.hisawa-j.fks.ed.jp/

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導



ライバル意識を育み家庭学習につなげる

◎地域の小規模校６校が連携し、２校１組で受講する「ライブ授業」と６校合同で実施する学習コンテストに取り組む。自校内では友だちに対してライバル意識をあまり持たない小規模校の生徒が、他校生と共に学習することで大きな集団の中で向上心が高まり、更に互いの学習意欲を高めていく。「ライブ授業」の内容やコンテストの練習問題はプリントにして事前に配布し、家庭学習を促している。

中学校を含む南会津地域内六つの単学級の中学校で「地域を担う人材育成のための学習サポート事業」（以下、「学習サポート事業」）を導入した。各校のコンピュータ教室でeラーニングを実施すると共に、通信添削教材を配布して宿題などに利用しようという取り組みだ。eラーニングの特徴を活用し、生徒の学習意欲向上と学習習慣を確立することをねらいとしている。

eラーニングでは、民間の外部講師による講義を配信する「ライブ授業」（P.28図1）を実施している。2校が1組となり、同時に受講する。教科は英語と数学で、どの学年も各教科年12回、学校選択の授業として行う。「ライブ授業」は約30分で、残り20分は各校の教師が授業を行う。

「ライブ授業」の内容は既習範囲の復習が中心で、問題演習を5問程度解き、その解説を聞く。生徒が1問ずつ考える時間を設け、生徒は解答を講師にチャットで送る。生徒の解答は講師にしか分からない仕組みであり、講師は受講者全員の解答を確認してから解説をし、正解者の名前を発表する。

「生徒は自分の名前が呼ばれればうれしいですし、呼ばれなければ『もっと頑張ろう』と思うようです。もちろん他校生の名前も読み上げられるため、共に学んでいるという実感が高まります」（渡部校長）

授業内容や時間配分は6校の教科担当があらかじめ話し合って決め、外部講師に伝える。外部講師ではなく、生徒の日常を最もよく把握している教師が授業内容や時間配分を決めた方が、生徒により適した授業が出来ると考えたためだ。「ライブ授業」1回ごとに、前年度に実施した同単元の「ライブ授業」の改善点を6校で出し合い、その年度の幹事校がまとめて講師側に伝える。各校との連絡は電話やファクスが基本だが、年4回程度、教科担当が集まって話し合う機会を設けている。

「他校の教師と意見を交換することで、他校の教え方の工夫、授業進度、生徒の反応などを知ることが出来ます。それを基に自分の授業を振り返れば、指導力向上にもつながります」（渡部校長）

「ライブ授業」で扱う問題はプリントにして授業前に生徒に配布し、家で解いてくるように指導している。30分という短い講義で効果的に学ばせるためだ。数学科の小林伸明先生は、「ライブ授業」と家庭学習のつながり

南会津町立檜沢中学校校長
渡部早苗 Watanabe Sanae
「自分のしっかりとした考えと他者への思いやりを持った生徒を育てたい」

南会津町立檜沢中学校
小林伸明 Kobayashi Nobuaki
教務主任、数学科担当。「服装や挨拶など日常生活すべてにおいて生徒の模範となる教師でありたい」

図1　「ライブ授業」を含む授業の様子（2年生 数学）

ライブ授業（30分）

❶ 講師と挨拶する（約1分）

「ライブ授業」冒頭、「こんにちは。よろしくお願いします」と、生徒がチャットで講師と挨拶を交わす。挨拶に使われる「みんなでチャット」は互いに内容を確認できるが、解答に使われる「こっそりチャット」は講師しか見られない

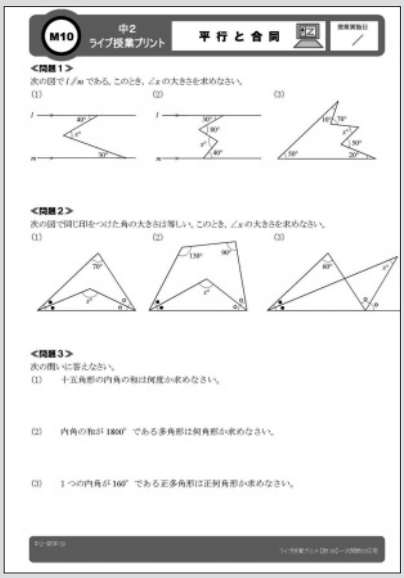
❷ 生徒が自力で考える時間（各3～5分）

1問ごとに考える時間を設けている。大半の生徒は事前に配られたプリントに家で解いてきているが、分からなかった問題は「ライブ授業」中に改めて取り組む。教科担当の教師が机間指導をしながら解き方をアドバイスする

❸ 講師による解説（各2～3分）

講師は1問ごとに受講者の解答を確認し、最も効率的な解き方を説明する。「この解法は高校入試でもよく出るので、しっかり身に付けてください」「かなり難度の高い問題でしたが、よく頑張りましたね」というようなコメントをした上で、正解者の名前を発表する

ライブ授業前に配布するプリント



M10　中2 ライブ授業プリント　平行と合同

＜問題1＞
次の図で $l \parallel m$ である。このとき、$\angle x$ の大きさを求めなさい。

(1)　(2)　(3)

＜問題2＞
次の図で同じ印をつけた角の大きさは等しい。このとき、$\angle x$ の大きさを求めなさい。

(1)　(2)　(3)

＜問題3＞
次の問いに答えなさい。

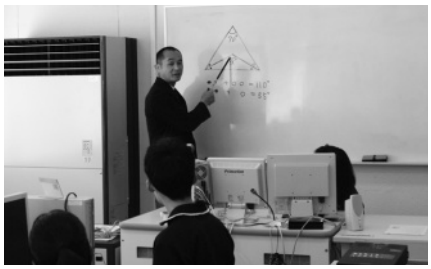
(1)　十五角形の内角の和は何度か求めなさい。

(2)　内角の和が 1800° である多角形は何角形か求めなさい。

(3)　1つの内角が 160° である正多角形は正何角形か求めなさい。

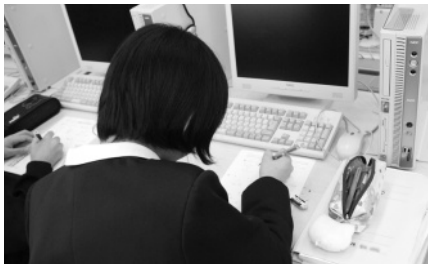
❹ 教師による補足説明（約7～8分）

「ライブ授業」は30分と時間が短く、講師は一つの解き方しか紹介できない。「ライブ授業」後に補足説明の時間を設け、通常授業での解き方の違いを説明する



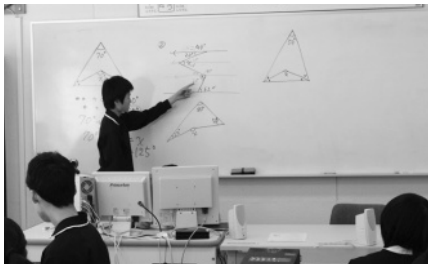
❺ 問題演習（約7～8分）

教師の補足説明後、新たにプリントを配布する。複数の解き方がある問題2～3問を教師が指定して解かせる。残りの問題は宿題とする



❻ 生徒による解答の発表と教師の解説（約5分）

生徒がホワイトボードに解き方と解答を書いて発表、教師が解説する

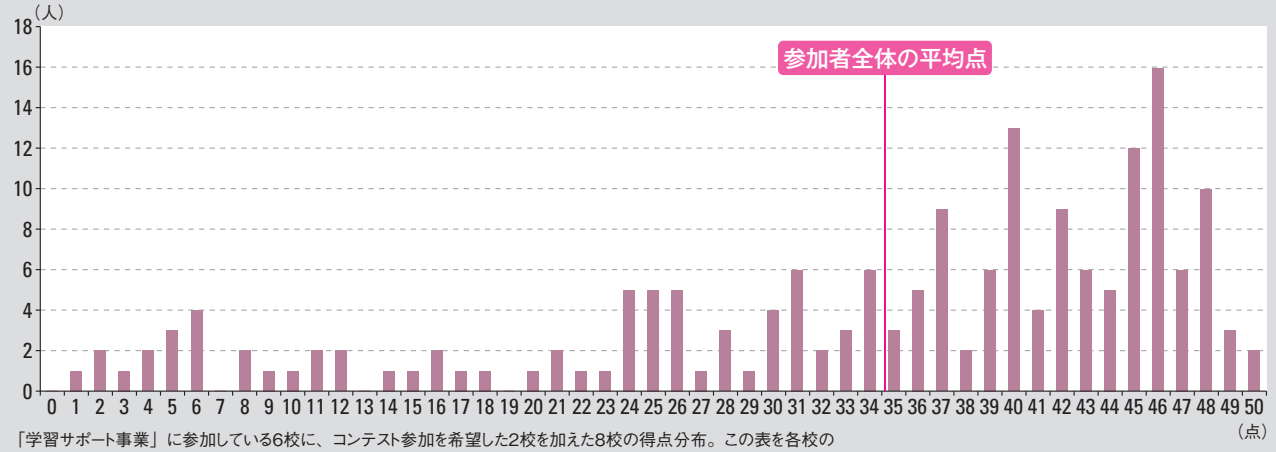


教科担任による授業（20分）

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

図2　2010年度「計算コンテスト」の点数分布（2年生）



「学習サポート事業」に参加している6校に、コンテスト参加を希望した2校を加えた8校の得点分布。この表を各校の生徒に配布し、自身の得点が全体でどの位置にあるかを確認させることで、学習意欲を高めようとしている

＊学校資料を基に編集部で作成

を次のように説明する。

「通常授業で一度学んだ内容をプリントと『ライブ授業』で繰り返し復習させることで、知識の定着を図っています。他校生に負けたくないという思いもあり、ほとんどの生徒がプリントを解いてきます。正解して講師から名前を呼ばれることで、生徒の意欲は高まるようです。授業＋プリント＋『ライブ授業』が、家庭学習意欲を高め、授業内容の理解を深める良いサイクルになっていると思います」

「ライブ授業」の他にも、学校同士をテレビ会議システムでつないだ「交流授業」を、英語と数学で年数回実施している。他校生が学ぶ姿が映し出されるため、生徒には良い刺激になっているという。

◎通常授業での工夫
多角的に検討する面白さが家庭学習の習慣化につながる

同校では「ライブ授業」後に20分間を使い、教師が必ず補足説明を行い、通常授業で扱った解き方と講師の解き方の違いを解説している。通常授業と「ライブ授業」を関連付けることで、生徒の学習意欲を更に高めるためだ。

次に複数の解き方がある問題を2～3問出題し、解き方と解答を生徒に発表させている。複数の考え方に触れさせ、一つの問題を多角的に検討させることによって、最も効率的な解き方はどれか、問題に応じて判断する力の育成を目指している。

「通常授業では、生徒が自力で解き方を工夫できるよう、考える時間を多く設け、その上で、生徒同士で解き方を相談させることもあります。相談するためには、まず自分の考えを持たなければなりません。自分なりの解答があるからこそ、友だちの解き方を見て、正解を導く方法は一つではないことに気付くのです」（小林先生）

◎6校合同の学習コンテスト
「得点できた」という達成感が更なる意欲につながる

「学習サポート事業」では、6校合同の「英語語彙力コンテスト」「計算コンテスト」を、2学期と3学期に実施している。長期休業中の自由課題として配布する練習問題を6校の教師が話し合って作り、その類題を学習コンテストで出題する。

「練習問題にきちんと取り組んでおけば、学習コンテストで高得点が取れるように作問しているため、生徒は『やったら出来た』という達成感を得られます。他校へのライバル意識もあり、ほとんどの生徒が長期休業後も、家庭で自主的に練習問題を繰り返し解いています」（小林先生）

成績は各校で共有し（図2）、校内平均点の上位3校を各校で発表する。渡部校長は、学校同士の競争意識が高まり、生徒は家庭学

図3　2009年度　学習意識・実態調査の結果

	学びの基礎力		学びに向かう力					自ら学ぶ力					学びを律する力					社会的実践力				
		豊かな基礎体験		感じ取る力	学習動機	自己効力感	自己責任		学習スキル	学習定着のための方略	学習計画力	自宅学習習慣		学習継続力	学習のけじめ	学習環境の整備	授業を受ける姿勢		問題解決力	社会参画力	豊かな心	自己成長力
全国中学3年	61.7	63.8	71.8	67.7	75.8	68.1	77.6	52.6	55.2	48.7	52.0	55.9	59.3	47.8	49.6	60.8	72.3	54.9	51.4	51.9	59.2	57.8
檜沢中3年	73.0	73.7	83.1	82.6	85.4	80.6	84.4	67.3	69.4	63.5	66.0	71.5	67.6	54.2	59.4	76.0	76.4	67.9	66.7	62.5	71.9	70.8

全国と比較して5ポイント以上上回っている項目　全国と比較して10ポイント以上上回っている項目

＊民間が実施した全国調査。数値はそれぞれの項目の肯定率（100%換算）を示す

＊学校資料を基に編集部で作成

習に意欲的になると話す。

「自分の成績が全体の平均点や目標点より低いと、『次の学習コンテストではもっと練習問題に取り組もう』と考えるようです。更にどの生徒にも、個人戦ではなく団体戦として学習コンテストに取り組んでいるという意識が芽生えます。学力下位層の生徒も『友だちと一緒に頑張ろう』『やればできる』と机に向かうようになっています」

成果、今後の課題

小テストのこまめな実施で学習習慣を定着させたい

檜沢中学校の取り組みの成果は、09年度、民間主催の学習意識・実態調査結果（図3）に表れている。22項目すべてで全国平均以上となり、「学習スキル」「学習定着のための方略」「学習計画力」「自宅学習習慣」など15項目で平均を10ポイント以上上回った。

生徒の様子の変化としては、授業中、生徒同士が積極的に意見を交換するようになり、発言の回数が増えた。また、同校では月2回の全校集会で、生徒が委員会活動等を報告する時間を設けているが、自分がどのような場面でやりがいや大変さなどを感じるかを、相手に分かりやすいように表現できる生徒が多くなっているという。

渡部校長は、課題の改善によって学習意欲を更に高めたいと話す。

「日常の授業の中でも、課題の内容を工夫して意欲をより高めていきたいと思います。例えば、ふるさとの山々の標高と気温の関係など、生徒に身近な題材を課題に取り入れるというような工夫です。また、既習事項を活用しながら『あっ』と驚くような意外な結果になる問題を工夫するなど、生徒に学ぶ喜びを感じさせ、考える力を高めることを更に心掛けていきます」

もっとも、学力下位層には学習意欲がなかなか向上しない生徒も見られるという。そのため同校では、通信添削教材を使って基礎問題の練習をする朝学習の時間にマンツーマンで指導し、諦めずに努力を続けるよう励ましている。上位層の生徒が教える姿も見られるという。また、毎週決まった曜日の放課後に個別指導をしており、こうした取り組みも家庭学習習慣の定着と意欲の向上につながっているようだ。

渡部校長は、今後について次のように話す。

「他校に対する良い意味での競争意識を学習に結び付けられるよう、テレビ会議システムを使った双方向の授業を充実させたいと思います。通常授業では、前回の内容を確認する小テストの導入などにより、授業中に知識を定着させる機会をこまめに設け、生徒に前回の復習に取り組ませることで、家庭学習の充実につなげたいと考えています」

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回
意欲を引き出す「家庭学習」指導

自校化の視点

他校との連携は生徒の学習意欲も教師の指導力も共に向上させる

福島県教育庁南会津教育事務所
学校教育課　指導主事
芳賀 淳
Haga Atsushi

◎取り入れたい考え方
他校生への競争心と問題を解く楽しさを融合

本県が「学習サポート事業」を導入した背景には、小規模校では生徒同士の競争意識が希薄だったことがあります。そこで、複数の小規模校の連携によって大きな集団をつくり、その中で育んだ生徒同士の競争意識を、学習意欲につなげようと考えたのです。

他校生の様子や成績を知ると、「他校生の方が自分より上だ」と感じたり、「もっと良い成績を取ろう」と学習に意欲を見せたりします。それを後押しするため、「ライブ授業」で扱う問題や「英語語彙力コンテスト」「計算コンテスト」の練習問題をプリントにして事前に配布します。プリントに取り組めば、「ライブ授業」や学習コンテストで確実に問題が解けるように工夫しているのです。

その成果は、生徒の意識調査の結果を見ても明らかです。「学習サポート事業」に参加する6校の家庭学習時間は、いずれの学校も県平均を上回っていました。中でも檜沢中学校の生徒は、最も意欲的に家庭学習に取り組むようになっています。

同校では普段の授業で、生徒が考え、意見を発表する時間を増やし、多様な考え方に触れる機会をたくさん設けています。自分で解き方を工夫し、友だちの意見を聞いて修正・改善する姿勢を持たせようとしているのです。宿題にも、複数の解き方が出来る問題や生徒にとって身近な題材を扱った問題を出し、学習意欲を高める工夫をしています。問題を解く楽しさや「やれば出来る」という実感と、他校に対する競争意識がセットになっているからこそ、家庭学習の時間も取り組む姿勢も大きく改善されたのだと思います。

◎他校と交流する意義
共同の作問会を通して教師の指導力も向上

「ライブ授業」は民間企業と提携した取り組みですが、扱う問題は6校の教師が協議して作成します。他校の教師との交流は、校内に同じ教科の担当者が少ない小規模校の教師にとって、授業づくりの工夫や課題を共有する貴重な研修の機会です。また、各校は朝学習や宿題で通信添削教材を使用していますが、こうした教材に触れることも教師にとって大きなメリットがあると思います。生徒の興味を引き付ける問題を出したり、分かりやすく解説したりする参考になるからです。「このような解説の仕方もあったのか」と、気付かされることもあるようです。外部のシステムや教材の活用により、教師も刺激を受け、指導力向上につながっていると思います。

生徒に競争意識を持たせるためにも、教師の指導力を伸ばすためにも、交流する学校は多い方が良いと考えています。学習コンテストの参加校は「学習サポート事業」の6校以外にも広がり、現在は管内の9校すべてが参加しています。今後も他校との双方向授業を一層充実させ、地域全体の取り組みへと発展させていきたいと思います。

家庭学習習慣化の取り組みは継続が大切です。他の中山間地でもＩＣＴの活用によって、小規模校同士が連携した指導は可能だと考えます。ほとんどの学校にあるコンピュータ教室やインターネット設備を生かし、指導を少しだけ工夫すれば、生徒同士が刺激し合う授業は実現できるはずです。

読者のページ

Reader's VIEW

2010年度 Vol.3特集「中学校導入期に学習習慣を定着させる」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト（http://benesse.jp/berd/）でご覧いただけます。

◎中１ギャップという課題に対応して小中をどうつなぐかの具体例があり、大変参考になりました。今までは小中の教員の交流くらいしか考えられていなかったので、子どもの学力に視点を当てて考える必要があることがよくわかりました。　［愛知県／ F中学校／ O・H］

◎「データから見る課題」のグラフで、「上手な勉強の仕方がわからない」生徒が64.5%であり、生徒に学習方法を教えることがいかに重要かを再認識できました。本校でもこのデータを活用し、学習意欲や学習習慣の改善に役立てたいと思います。［北海道／ M中学校／ S・T］

◎校長先生の対談にあった、学校として指導を統一するために校長が指揮を執るということが新しい視点でした。担任教師の差はどのような場面においても見られますが、それを少しでもなくす手立てとしてよい考えだと共感できました。　［北海道／ H中学校／ N・M］

◎「習う」と「学ぶ」の違いにうなずきました。私たちがまずこの違いを押さえて授業をすることが大事だと実感しています。「習慣が人生を変える」という言葉を思い出しました。　［岐阜県／ D中学校／ H・R］

◎授業も家庭学習も、小学校と大きく違うことに、戸惑ったり、波に乗れなかったりする生徒がいるのが現状です。狛江市立狛江第三中学校のシラバスは、本校のガイダンスでも参考にしたいと思います。春休みの課題を中学校で作り配布する取り組みも、すばらしいと思いました。　［大分県／ D中学校／ K・K］

◎狛江市立狛江第三中学校の事例は、自校化したいと思いました。中学入学後に実施していた学習オリエンテーションの前倒しとして有効だと思います。ただ、小中の発達段階の差もあり、確固とした信頼関係のない中学校と小学校で意思疎通がどれほど出来るのか、やや不安な面もあると思いました。［鹿児島県／ S中学校／ S・M］

◎羽咋市立羽咋中学校の入学前後の２回の合宿で、新入生を「中学生にする」という意気込みは、共感できる内容でした。　［宮城県／ F中学校／ C・S］

◎羽咋市立羽咋中学校の事例で、小６と中１の合同合宿に驚きました。小中連携がよく出来ており、教育委員会の支援があるからこそ、学校は自信を持って出来るのだと思いました。　［福岡県／ C中学校／ S・K］

◎本市でも、出前授業による小・中学校の交流、小学校教員が作成した新入生テストを行っていますが、形式的なものになっています。嬉野市立塩田中学校の事例は、学習課題や確認テストを活用して生徒を中学校の学習サイクルに慣れさせ、自信にうまくつなげる工夫がありました。何よりも、教育委員会の支援が連携をスムーズにしていると思いました。［富山県／ F中学校／ O・M］

◎小６春休みから中学校入学までの空白は、確かに何か手立てがあると感じました。今まではのんびりと心と体の休養や準備に充てればよいと思っていましたが、これが中１ギャップの原因の一つになっていることを考えさせられました。　［新潟県／ Y中学校／ K・T］

◎地域や学校の実態に応じ、学校単体で教育する時代は終わったと思います。京都市教育委員会が学校を支援する様子を見て、自治体ぐるみの力がどんなに強力なものかと感激しました。　［岩手県／ T中学校／ N・T］

編集後記

2009年度のVol.2に続き「家庭学習」を特集しました。取材を通じて、先生方、保護者、そして恐らく生徒自身もが理想とする学習習慣は、いずれも同じ方向であるように感じました。「課された宿題をこなす」から「自ら興味を持ったことを広く深く学ぼうとする」姿勢へといかに導いていくか。今回お話を伺った学校それぞれが、各校の実態に合わせて、一斉指導と個別対応のバランスを苦心して工夫されている点が印象的でした。（久保木）

VIEW21 中学版 2010 Vol.4　2011年2月16日発行／通巻第308号

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太、長谷川敦、山口慎治
撮影協力　荒川潤、川上一生、筒井岳彦

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部　＊2月21日に移転いたします
◎2011年2月21日から
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビルディング13階
電話 03-5320-1287
◎2011年2月20日まで
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー 22階
電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2011